

# 新聞に見る静岡大学 2018年度

種別表示 ● 教育・学生 ■ 研究 ◆ 地域連携・社会貢献 ▲ その他(管理運営等)

(内容によっては、表示以外の種別にも関連のある場合もあります。)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
◆	『理系女子目指し見学』静岡大男女共同参画推進室は28日、「理系女子」を目指す中高生らを対象にした見学会を浜松市で開いた。県内の26人が光関連産業の浜松ホトニクスの研究施設を訪れ、女性研究員の話や進学や就職への決意を新たにした。	(3/30 静岡)
▲	『静大・浜松医大きょう合意』静岡大と浜松医科大は29日、法人統合と大学再編による1法人2大学制への移行に向け、合意書を締結した。両学長が静岡市内で調印し、記者会見で合意内容や目的について説明。	(3/29,30 静岡・中日・朝日・毎日・読売・日経)
◆	『日本の小学校 事前体験』外国籍の子どもらに、入学前に日本の小学校生活を体験してもらう「びよびよクラス」が浜松市で開かれている。クラスの先生役は、静岡大などの学生で作る団体「WISH」のメンバー。専門家の指導を受け、保護者に説明会を開いた上で実施している。	(3/29 読売)
▲	『静岡大法学科が28日から2次募集』静岡大は28日にちから、人文社会科学部の推薦入試で欠員補充のための2次募集を行う。募集は法学科で定員7人。	(3/26 静岡)
●	『恩師や学友に謝意』静岡大は23日、静岡地区卒業式を同区のグランシップで行った。教育学部や理学部の卒業生、人文社会科学研究科などの修了生計約1400人が新たな一歩を踏み出した。	(3/24 静岡・中日)
◆	『減災から防災 想像力を』第432回中日懇話会が22日行われ、静岡大防災総合センター長の岩田孝仁教授が「減災から防災社会へ」と題して講演した。	(3/23 中日)
▲	『しずおかキャンパー』全国で行われている「キャンパー」の創刊30周年を記念してしずおかキャンパー、とちぎキャンパーの学生記者が座談会を行った。参加者：伊東紗央子(静岡大1年)、増田裕太(静岡大1年)	(3/23 毎日)
▲	『人・ひと』「独裁の中国現代史」を執筆した静岡大 楊海英教授。今年は中国の建国70周年。中国の現代史を振り返り、日本の読者に理解を深めてもらいたいと筆を執った。1989年春、モンゴル研究のため来日。研究者の道に進み、99年から静岡大で文化人類学を教えている。2010年には著作が司馬遼太郎賞を受賞。	(3/23 朝日)
▲	『再編合意延期助言を』静岡大と浜松医科大が検討中の法人統合・大学再編による1法人2大学制への移行構想で、現行案に反対する静岡大教職員が22日、同大学長選考会議に対し、石井潔学長に案の再検討と納得できる合意形成、基本合意の延期を助言するよう請願した。	(3/23 静岡・中日)
▲	『静大評議会 僅差で賛成』静岡大は19日、石井潔学長や理事、各学部長らでつくる教育研究評議会を開き、浜松医科大との法人統合・大学再編案について評議員27人の意向を確認し、賛成が反対を上回った。役員会で最終決定する。	(3/20 静岡・朝日)
■	『学生が課題解決策発表』しずおか中部連携中枢都市圏を形成する5市2町の地域課題解決事業の発表会が18日開かれた。静岡大を含む県中部6大学の学生らが課題を抱えている地域に入り、25の研究成果をまとめた。静岡大情報学部は3研究室合同で県立川根高の魅力向上に取り組んだ。	(3/19 静岡)
▲	『「議論尽くされてない」』静岡大と浜松医科大が検討している法人統合・大学再編による1法人2大学制への移行構想で、静岡大静岡キャンパスの有志が18日、現行案への反対を表明する記者会見を県庁で開き、「十分に議論が尽くされたとは言えない」と合意形成の過程を批判した。	(3/19 静岡・中日・朝日・毎日・読売)
◆	『学生が研究成果』藤枝市と包括連携協定を結ぶ、静岡大農学部他県内5つの大学の学生たちが14日、女性活躍や広域観光、人口対策などをテーマに研究した成果を発表した。	(3/17 静岡)
◆	『研修連携、受講者増へ』静岡大防災総合センターと県が主催し、災害科学的な基礎を持つ実務者を育てる「ふじのくに防災フェロー要請講座」のシンポジウムが16日、静岡大で開かれ、本年度の活動を振り返った。同大の牛山素行教授が講座状況について報告し、「今後は他の研修とも連携しながら、受講者の増加対策を図りたい」と説明した。	(3/17 静岡)
●	『小泉君に理事長賞』静岡市の経済人や知識人でつくる「静岡倶楽部」は15日、市内小中学生の優れた研究をたたえる理事長賞授与式を同市で開き、理事長賞には静岡大附属静岡小6年の小泉剛慎君が選ばれた。他の受賞者/静岡ロータリークラブ賞 河内基希(静岡大附属静岡小6年)/努力賞 石橋史悟(静岡大附属静岡小6年)	(3/16 静岡)
▲	『静大再編「熟議を」』静岡大と浜松医科大が検討中の法人統合・大学再編による1法人2大学制への移行構想で、静岡大の佐藤博明元学長ら教員OB約30人が15日までに十分な検討と熟議を求める書面を同大教育研究評議会に提出したことが分かった。	(3/16 静岡)
■	『科学研究の成果解説』静岡大理学部は14日、各分野で活躍する研究者が自身の研究内容などを紹介する市民向け講座「サイエンスカフェin静岡」を開いた。同学部地球科学科の佐藤慎一教授が「潮干狩りの古生物学」と題して講演した。	(3/16 静岡)
■	『静岡大がファインバブル装置』静岡大学学術院工学領域の間瀬暢之教授は液体中に直径100マイクロメートル以下の微細気泡「ファインバブル」を発生させる小型装置を開発した。洗浄・殺菌効果も見込まれ、幅広い分野での応用が期待される。	(3/13 日経)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
◆	『だもんで』静岡大学人文社会科学部・地域創造学環編「大学的静岡ガイド-こだわりの歩き方」という本が発売される。地域に根ざし、教育・研究にあたってきた地元大学の研究者が執筆しているのが特徴。人文社会科学部をはじめ、他学部も含め総勢36人の研究成果が集成され、総合的に「静岡」を描写している。このような研究成果を社会に広く公開していく努力を続けることが私たちの使命である。(静岡大人文社会科学部 日詰一幸教授)	(3/14 朝日)
◆	『時評』東日本大震災時、校舎が屋上まで津波に覆われ、学区内では260人が死亡・行方不明となったが、在籍の生徒・教職員は全員が無事だった気仙中学校のことはあまり報道されていない。気仙中では津波を想定した避難訓練や津波体験者の防災講義の実施、これまでの津波警報の際にも実際に避難しており、地道で息の長い積み重ねが重要ではないかと考える。静岡大防災総合センター 牛山素行教授)	(3/14 静岡)
◆	『こだわり街歩き 静大がガイド本』静岡大の教授らによる県内の歴史や文化などをテーマにした、こだわりの街の歩き方を紹介する本「大学的静岡ガイド」が出版された。同学部などは17日、出版記念シンポジウムを開き、人文社会科学部の戸部健教授や教育学部の白井嘉尚教授・平野雅彦特任教授らがこだわりのまち歩きを指南を行った。	(3/13,14,15,18 静岡・中日・毎日・朝日)
◆	『静岡大、企業と連携加速へ』県が2019年度富士市に開設する新素材セルロースナノファイバーの研究拠点「ふじのくにCNF研究開発センター」に入居する静岡大の鈴木滋彦副学長らが県庁を訪ね、今後の活動方針などを説明した。鈴木副学長と青木憲治農学部特任教授が5月をめぐりにオフィスを開設し、民間企業との情報交換や技術連携を深める考えを示した。	(3/13 静岡)
▲	『静大で出題ミス』静岡大は12日、同日実施した一般入試の後期日程で、教育・情報・工・理学部が対象の数学で出題ミスがあったと発表した。	(3/13,14 静岡・中日・朝日・毎日)
▲	『女性教員有志が再編反対の声明』静岡大と浜松医科大が検討している法人統合・大学再編について、静岡大の女性教員有志が12日、執行部への反対声明をまとめ、同日現在で教員40人以上が署名。	(3/13,14 静岡・中日・毎日)
■	『静岡発 私の提言』2018年春、伊豆半島がユネスコの世界ジオパークに認定された。ジオパークは地域の誇りと財産、人材を維持し、継承させていく巧妙な仕組みである。この地域活性化のツールを伊豆半島のみでとどめておくのは惜しい。伊豆以外で静岡県の大地の成り立ちを語る最良の場所は浜松周辺であり、過疎化が進む北遠地域の活性化のために浜松周辺のジオパーク認定を薦めたい。(静岡大学地域創造学環 小山真人教授)	(3/12 日経)
◆	『地域や産業に貢献期待』静岡大イノベーション社会連携推進機構と浜松いわた信用金庫は「静岡大学産学連携奨励賞」と「浜松いわた信用金庫産学連携大賞」の表彰式を同大浜松キャンパスで開いた。地域や産業への貢献が期待される同大の研究者3人を表彰した。 同奨励賞最優秀賞：小野篤史(学術院工学領域電子物質科学系列) 同奨励賞優秀賞：伊藤友孝准教授(同領域機械工学系列) 同連携大賞：桑原義彦教授(同領域電気電子工学系列)	(3/12 静岡)
●	『小泉八雲文芸作品コンクール』小学生の部 優秀賞 土屋侑大(静岡大附属静岡小4年)	(3/11 静岡)
●	『高島さんら優勝』静岡市長杯こども将棋大会 上位入賞者 中学生の部 高島康太(静岡大附属静岡中3年)/望月新太(静岡大附属静岡中1年)	(3/11 静岡)
■	『新工ネ実用化 県内挑む』静岡県内で、大学と地場企業が新工エネルギーの実用化を目指す動きが相次いでいる。静岡大学グリーン科学技術研究所の木村浩之教授は県内企業と組み、静岡市内の温泉井戸に生物反応器を設置し、2種類の微生物を使って温泉水からメタンや水素を取り出す技術の実証実験を始めた。	(3/9 静岡)
◆	『静大法科大学院 月末廃止』静岡大の法科大学院が3月末で廃止となり、14年間の歴史に幕を閉じることが分かった。今後は、2016年に新設した地域法実務実践センターが人材育成と地域貢献の役割を引き継ぐ。	(3/9,13 静岡・中日)
▲	『津波リスク 人口流出に危機感』南海トラフの津波で静岡県内では約10万人の死者が出ると予想。沿岸部の住民の不安は尽きない。地方自治体の財政や災害対策に詳しい川瀬子静岡大教授は、ハード・ソフト両面での津波対策の必要性を訴えつつ、「住民ち行政が話し合い沿岸部の人を取り残さない避難の仕組みを整え、海を生かしたまちづくりをしてほしい」と話す。	(3/8 朝日)
●	『ガーナ留学の経験 紹介』文部科学省が展開する官民協働の留学支援制度「トビタテ！留学ジャパン」でガーナに滞在した静岡学園高2年 加藤穂乃佳さんが、母校の静岡大付属静岡中で報告会を開いた。中学1年の後輩たち約140人を前に、同国の文化や現地での活動を紹介した。	(3/8 静岡)
■	『ごみ溶融スラグ肥料発売』JA静岡経済連、静岡市、新日鉄住金エンジニアリング、静岡大は7日、同市西ヶ谷清掃工場の家庭ごみの処理過程で生成される最終廃棄物「溶融スラグ」を原料にした農業用肥料の販売を同日から開始した。溶融スラグ肥料の販売は全国初。記者会見にて静岡大農学部の森田明雄教授は「調査に協力いただいた農家から『稲が丈夫になった』『収量が増えた』との声が上がっている」と説明。	(3/7,8,11 静岡・毎日)
▲	『浜医大と再編、静大内反対強く』静岡大と浜松医科大が検討している法人統合・大学再編による1法人2大学制への移行構想。静岡大静岡キャンパスを中心に反対論は根強く、反対表明や上申書などが提出されている。一方両大の執行部は3月末にも基本合意書を締結する意向を崩していないとみられ、重要局面を迎える学内手続きに注目が集まる。	(3/8 静岡)
▲	『地域志向の教育 議論』県内外の大学や自治体、経済団体などでつくる静岡COC+連携協議会(事務局・静岡大)は4日、シンポジウム「地域志向教育プログラムは成功しているか」を開いた。	(3/7 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
●	『"春"届く 受験生歓喜』静岡大で6日、一般入試前期試験の合格発表が行われた。受験生たちは自分の受験番号を見つけると、家族と抱擁したり記念写真を撮ったりして合格を喜んだ。	(3/6,7 静岡・中日)
▲	『回路設計学習キット アート電子が発売』プリント基板設計・製造のアート電子(浜松市北区)は、電子機器の回路設計の学習セット「アートデジキット01」を発売した。静岡大工学部等で試用してもらったところ好評だったため、本格的に販売を開始。	(3/6 中日)
◆	『統合再編「再考を」』静岡大と浜松医科大が検討中の法人統合・大学再編による1法人2大学制への移行構想で、執行部案に反対している静大教員の一部が、案の再検討と基本合意延期を助言する方針を固めたことが分かった。	(3/6 静岡)
▲	『平成の大合併 浮かぶ光と影』交付金を使った国の「アメとムチ」で焦った自治体が多く、合併がうまくいった事例は少ない。住民の利益を冷静に判断できる首長や議員を見極めることが重要だ。(静岡大 川瀬憲子准教授)	(3/5 朝日)
▲	『教職員の待遇変えず』静岡大と浜松医科大が協議を進めている国立大法人統合と両大の再編で、両大が今月中に調印するとみられる合意書案について、新大学名については文部科学省との調整を見据えて決定を見送るほか、両大に所属する教職員の身分や待遇を法人統合後も維持することを保障する内容が含まれることが分かった。	(3/5 中日)
▲	『病院会計は「独立採算」静大・浜医大が検討』静岡大と浜松医科大が目指している1法人2大学制への移行構想で、両大の執行部が、医学部附属病院の会計を独立採算とする方向で検討を進めていることが分かった。3月末の調印を目指す基本合意書に盛り込む方針。	(3/5 静岡)
▲	『「静岡国立大学機構」新法人名固まる』静岡大と浜松医科大が協議を進めている国立大法人統合と大学再編で、両大でつくる新法人の名称が「静岡国立大学機構」で固まったことが分かった。今月末に調印される予定の合意書に盛り込まれる見通し。	(3/2,3 中日・静岡)
●	『巨大地震に備え地域防災力の向上を』「地域防災力向上シンポジウムin静岡2019」が2/3行われ、事例発表1「地域と大学を結ぶ防災サークル」として学生防災団体の静岡大学学生防災ネットワーク(河村拓斗氏、勝谷勇介氏、上田啓瑚氏、櫻木哲朗氏)が発表した。	(3/2 中日)
◆	『ラスク開発 お礼の気持ち』静岡大附属特別支援学校中等部の生徒18人と地元のパン屋「モンパレナス」は昨年11月、協力してオリジナル商品を開発した。店はお礼の気持ちを込めて1日、生徒に手作りすごろくを贈った。同校では授業の一環で、地元のパン店や製茶店、菓子店の商品案や製品ラベルを考えたりし、地元の魅力を知る時間を作っている。	(3/1,8 中日・静岡)
▲	『学生優位 就活スタート』2020年春卒業予定者を対象にした会社説明会が1日解禁され、大学生らの就職活動が本格的にスタートした。静岡大の女子学生は「ルールはあっても早くから動いている同級生も多かったので、就活本番を迎え不安でいっぱい。希望職種に就けるよう落ち着いて臨みたい」と話した。	(3/1 静岡)
▲	『豪雨被害教訓に 静大教授が講演』昨年7月の西日本豪雨などの災害を研究している静岡大防災総合センターの牛山素行教授による防災講演会が3/3に開かれる。「地域を知り、防災を考えるー最近の豪雨災害事例から学ぶこと」と題し、これまでの災害を教訓に、心構えや対策を語る。	(2/26 中日)
■	『静岡の在来作物 食文化学び合い』特定の地域で世代間で継承されて栽培されている「在来作物」を研究する静岡在来作物研究会はこのほど、学生と生産者が在来作物について学び合うコンファレンスを開いた。同会会長の静岡大農学部富田涼都准教授は「在来作物はなぜ地域固有の形質が残ったのかなど謎が多い。学生・生産者はじめ地域が連携して研究を進める必要がある」と話す。	(2/26 静岡)
▲	『県内5740人が志願』国公立大2次試験の前期日程が25日、全国各地の大学で始まった。県内では4大学で試験を実施。静岡大は志願者数3170人、志願倍率3.1倍。	(2/25,26 静岡・中日)
■	『新素材研究拠点 富士市に』植物由来の新素材「セルロースナノファイバー(CNF)」の研究開発を促進するため、県は新年度、産学連携拠点「ふじのくにCNF研究開発センター」を県富士工業技術支援センター内に設置する。拠点には、静岡大農学部の教授や公募企業等四つの団体・企業の入居を想定。	(2/25 読売)
▲	『「新名称」決定保留へ』静岡大と浜松医科大が協議を進めている国立大法人統合と大学再編で、両大が2018年度中の新大学名の決定を見送る方針であることが分かった。	(2/24 中日)
●	『静大院生挑む 初の「フル」』24日開催の静岡マラソンには男子学生の部の表彰もあり、招待選手を7人を含む38人の学生ランナーが出場する。招待選手の一人が、静岡大大学院1年の金子雅也選手。地元の誇りを胸に、初のフルマラソンで2時間20分切りに挑む。	(2/21 朝日)
▲	『国公立大2次4.7倍』文部科学省は20日、今年の国公立大2次試験の確定志願者数が昨年から4128人増の46万9836人だったと発表した。静岡大は4.6倍(昨年4.2倍)。	(2/21 静岡)
▲	『静岡発 こう読む』学生時代に、自分で計画をして海外を体験することはとても貴重である。これから学生たちは進路を決めていくことになるが、卒業する前に海外へ行き、日本とは異なる文化に触れることはかけがえのない機会になるだろう。(静岡大 日詰一幸教授)	(2/17 中日)
●	『園児、児童らの書き初め展示』静岡地区書きぞめ展 市長賞 見城菜々子(附属静岡小5年)	(2/16 静岡)
●	『入賞作338点決定』第42回蘇峰会書道展の入賞者が14日までに決定した。 徳富蘇峰賞：池田友菜(静岡大附属島田中2年) /静岡市教育長賞：見城菜々子(静岡大附属静岡小5年) /蘇峰会賞：田代愛実(静岡大附属島田中2年)	(2/15 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
■	『可燃ごみを固体燃料に』静岡大学はごみを燃料として再利用できる新たな技術を開発した。都市部を中心としてごみ問題に悩む中国の企業と組み、実用化に向けた実証実験に乗り出す。製造した燃料は高い発熱量が得られ、発電にも使える。静岡大 佐古猛特任教授は「燃焼時に有害ガスが発生せず、長期間保存できるのも利点」と話す。	(2/14 日経)
●	『ラグビーW杯の現場研究を発表』御前崎市のスポーツ・観光振興を題材にフィールドワーク活動を展開する静岡大 地域創造学環の1年生7人が13日、研究成果の中間発表を市役所でを行った。中野希音さんと平田直也さんは「ラグビーW杯のレガシー（遺産）を残すために」と題して発表。	(2/14 静岡)
●	『300人 本番さながら グランシップリハ』3月に開催するグランシップの開館20周年を記念した音楽祭のリハーサルが11日に行われた。静岡大学混声合唱団他、参加が予定されている学生らが参加し、本番さながらに練習に力を入れた。	(2/13 読売)
■	『時評』インドネシアのスダ海峽で昨年12月に発生した津波では犠牲者400人を超える大災害となった。地震に伴う津波ではなかったために警報が出せず、被害を大きくしたとみられる。発生源であるクラカタウ火山は長年にわたる噴火により火山砂礫の上に厚い溶岩が乗る不安定な構造をしており、これが山体崩壊を起こしたのが津波の原因であった。このような津波の発生日時を予知して警報を出すことは困難であり、噴火に伴う津波等に対する検討は十分でないのが実情である。（静岡大防災総合センター 小山真人教授）	(2/13 静岡)
▲	『国立大法人 統合可能に』政府は12日、国立大学法人法改正案を閣議決定した。これまでは1法人が1大学を運営するとしていたが、大学を残したまま経営主体である法人のみを統合できるようになることが柱。県内では静岡大と浜松医科大が法人統合に向けて協議を進めている。	(2/12 静岡・中日)
▲	『受賞67件決まる』公益財団法人はごろも教育研究奨励会はこのほど、優れた教育研究を行って顕著な実績を挙げた学校・園や教職員に贈る「第33回はごろも教育研究奨励賞」の受賞団体・個人を決めた。授与式は14日に行われた。【学校賞】静岡大附属特別支援学校/【個人賞】隅田浩之（静岡大附属特別支援学校教諭）/高橋正宏（静岡大附属静岡中教諭）	(2/11,15 静岡)
●	『浜松の開成中 静大が全国へ』第45回東海アンサンブルコンテストが9日に始まり、東海5県から43団体が出場した。静岡大（クラリネット四重奏）は金賞を受賞し、3月21日に札幌市である全国大会に出場する。	(2/10 朝日)
◆	『小学生が英語スピーチ』静岡大、常葉大、静岡英和学院大、東海大の学生で作る英語サークルEMASは9日、小学生の英語スピーチコンテストを開いた。県内各地の小学生52人が参加し、練習の成果を披露した。	(2/10 静岡)
●	『美術と書写 18人表彰』県内の小中学生を対象にした美術書写作品コンクール「第40回ジュニア県展」の特別賞の表彰式が9日、県立美術館で開かれた。書写の部で県知事賞に輝いた塚本萌加さんは漢字と仮名の大きさや配列の美しさが高い評価を受けた。	(2/10 静岡)
●	『絵画や彫刻で学び集大成披露』静岡大教育学部で美術を専攻する4年生と同大学院教育研究科2年生の「卒業・修了制作美術展2019」が8日、グランシップで始まった。今春卒業を予定している学生と院生30人が絵画や彫刻、デザイン、美術教育の各分野で、学びの集大成となる作品を出展。	(2/9 静岡・中日)
▲	『静大校長 意見書に反論』静岡大と浜松医科大が検討している法人統合・大学再編による1法人2大学制への移行構想を巡り、石井潔学長は7日までに、各部署から提出された意見書に対する自身の見解を文書にまとめ、学内に示し、「表面的な『イメージ』のみに基づく反対論が多かった」と反論した。	(2/8 静岡)
■	『時評』東日本大震災直後には全国各地で津波対策が議論されたが、県内でも具体的に防潮堤のかさ上げなどに至った地域はごく限られている。教訓を後世に伝えることが課題ではない。教訓をもとに、建物の耐震対策や津波対策に具体的に取り組み、後世に実態を残すことが多くの犠牲者への追悼ではないか。（岩田孝仁 静岡大防災総合センター長）	(2/7 静岡)
◆	『助産師の仕事体験』静岡大附属中の1年生3人が6日、静岡赤十字病院で職場体験学習に取り組み、助産師や看護師の仕事を経験した。助産師の仕事を経験した八木佑美花さんは「赤ちゃんの命を扱う仕事に責任の重さを感じた。この経験を生かし、将来は医療関係の職に就きたい」と話した。	(2/7 静岡)
▲	『国公立大2次試験志願状況』文部科学省は6日、国公立大2次試験の出願最終日となる同日午後3時現在の志願状況を発表した。静岡大の平均志願倍率と志願者数は、4.5倍、6807人。	(2/7 静岡・朝日・毎日・日経)
▲	『しそーかゆるさんぽ』静岡市の久能海岸沿いでいちご狩りを体験、駿河湾を眺めながら1159段の石段を上り、久能山東照宮を参拝した。（静大TV・山科彩葉） 静岡大学テレビジョン(静大TV)2013年4月創設のウェブ動画サイト。学生を中心に学内の動きなどを撮影、編集、発信している。18年度から「アットエス(@S)」と連携協定を結び、活動の幅を学外にも広げている。	(2/6 静岡)
◆	『看護業務に挑戦』静岡大附属静岡中の生徒が5日、静岡厚生病院で職業体験を行った。医療職を目指す1年生4人が参加。内科病棟では「足浴」に挑戦し、2人1組で患者と丁寧なコミュニケーションをとりつつ作業した。松本和佳奈さんは「目線やしぐさから感情を読み取ろうと努力した」と話した。	(2/6 静岡)
◆	『大学で留学生就業体験』県中小企業団体中央会からは2月中旬から、外国人留学生と県内中小企業をつなぐインターンシップを静岡大静岡キャンパスで行う。インターンシップをコーディネートする同大国際連携推進機構の大八木智一特任教授は「具体的な経営課題の解決策を探る中で企業理解が深まる。留学生らが県内企業に目を向けるいい機会になるのではないかと話す。	(2/6 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
■	『想像力働かせ減災』南海トラフ巨大地震などに備えるための防災の在り方を考える「地域防災向上シンポジウム」が開かれ、岩田孝仁静岡大防災総合センター長が基調講演した。岩田センター長は阪神・淡路大震災や東日本大震災の被害を説明し、県内の防災設備の整備状況に触れながら、ハード対策の重要性も指摘した。消防団員や静岡大生らも登壇し、救急講習や防災勉強会の開催、炊き出し訓練などそれぞれの活動を紹介した。	(2/4 静岡)
▲	『浜松市行政区再編 どうみる』浜松市の行政区再編の意義について、山間部に居を構えて県内の地域政策を間近に見つめてきた小桜義明静岡大名誉教授に地方自治の観点から聞いた。集権化よりも地域特性を重んじて分権化し、地域住民に権限を与えることで浜松らしい市民の力を引き出す行政組織にする必要がある。	(2/3 朝日)
■	『地震予知の現状解説』ふじのくに地域・大学コンソーシアムは2日、防災専門家らによる連続講座「知っておきたい地震と火山と防災」の最終回を開いた。静岡大防災総合センターの小山真人副センター長は、火山活動と伊豆半島ジオパークの関わりについて講演した。	(2/2 静岡)
●	『田代さん 大臣賞』全国小・中学生書道・交通安全ポスターコンクールの表彰式が1日に行われ、書道条幅の部で静岡大附属島田中2年の田代愛実さんが農林水産大臣賞に輝いた。	(2/2 静岡)
■	『専門家「調査項目拡大を」サクラエビ異変』サクラエビの不良を受け、由比漁協は富士川流域から採取した泥の分析調査結果について、有機物による汚染は確認されなかったと発表したが、静岡大のカサレト・ベアトリス・エステル教授ら専門家は「調査項目を更に広げる必要がある」と不十分さを指摘。よりサクラエビの生態に即した項目や手法を加えて調査すべきと強調した。同大の鈴木款特任教授も「今回は海底の泥の汚染がないことが分かっただけ」と調査継続が不可欠とした。	(2/2 静岡)
▲	『教員就職率、0.4ポイント減』全国44の国立の教員養成大学・学部を2018年3月に卒業した人の同9月末時点の教員就職率が、前年比0.4ポイント減の58.9%だったことが31日、文部科学省の調査で分かった。静岡大は同4.3ポイント増の55.2%。	(2/1 静岡)
▲	『だもんで/「住民協議会」市民に不可欠な場』無作為抽出で募った参加者で地域の課題解決策を話し合う「住民協議会」が各地で設けられている。できる限り多くの市民に公的な事柄について自らの意見を言える機会を設けようとする試みだ。住民の主体性を醸成するためにこのような地道な活動が不可欠である。	(1/31 朝日)
■	『交通アクセス 意見最多』静岡市役所清水庁舎のJR清水駅東口への移転を議論する検討委員会(委員長・日詰一幸静岡大教授)の最終会合が29日、行われた。市は昨年12月からパブリックコメントを募集し、市民559人から1,705件の意見が寄せられた。市はこれらを反映した基本計画案を委員らに提示し、意見を集めた。	(1/30 中日)
●	『国公立大2次出願スタート/県内4大学も』国公立大170校の2次試験の願書受け付けが28日、始まった。県内では静岡大をはじめ4大学で受付が始まり、昨年同様インターネット出願を実施した静岡大では一般入試、推薦入試の願書計52通が届いた。入試課は「願書の取り寄せが不要になるなど、利便性が上がった。入力、送付間違いがないよう落ち着いて手続きしてほしい」と話した。	(1/28 静岡)
●	『静岡大とヤマハ 朝日新聞社賞』第52回県管打楽器アンサンブルコンテスト 大学の部 【朝日新聞社賞(最優秀)・金賞】 静岡大・金管八重奏B(東海大会出場) 【金賞】 静岡大・クラリネット四重奏(東海大会出場) 静岡大・木管五重奏	(1/28 朝日)
■	『ごみ、固体燃料に/静岡大が技術開発、実用化へ』静岡大は25日までに、可燃性の都市ごみや海洋プラスチックごみを高温水蒸気で加熱し、石炭と同等の発熱が可能な固体燃料に変換する技術を開発した。ごみ問題が深刻な中国の設備メーカーと共同研究を進める静岡大創造科学技術大学院の佐古猛特任教授は「まずは中国で成功例を作り、いずれは日本にも広げたい」と語る。	(1/26 静岡・中日)
▲	『静岡4学部 原案反対』静岡大と浜松医科大が検討している法人統合・大学再編による1法人2大学制への移行構想案を巡り、静岡大の6学部の内4学部が反対の意思を伝える意見書を同大執行部に提出していたことがわかった。	(1/26 静岡)
■	『人間のようなAI まだ先』静岡大と中日新聞の連携講座「静岡大学の現在」第5回は情報学部の狩野芳伸准教授が「コンピューターは言語を操れるか～自然言語処理による知的システム構築の挑戦～」と題して講演した。囲碁や将棋は答えが決まっているが、会話は答えがないので一番難しい分野で、人間のようなAIの実現はまだ先の話だという。	(1/24 中日)
▲	『「社会どう支える」/静岡大OB弁護士が講演』静岡大で23日、法学科40周年記念講演が行われ、同学科卒業生で神奈川県弁護士会長の芳野直子さんが「市民のための弁護士を目指して－静岡大で得た宝」と題して講演した。法学科と大学院法務研究科の教員らでつくる「静岡大法政学会」が主催。芳野さんは「社会とつながるきっかけをぜひ探して変わりゆく社会をどう支えていくか考えてほしい」と学生に呼び掛けた。	(1/24 静岡)
■	『静岡衛星 通信不具合も』静岡大工学部は23日、同学部が開発した超小型人工衛星「てんりゅう」と「あおい」の運用報告会を開いた。同学部の能見公博教授らが2018年10月に宇宙空間へ放出された2基の現状を紹介し、通信面に不具合がある点などを説明した。能見教授は「まだ諦めていない。致命的な問題ではないので、何とか電波をとらえられれば」と話した。	(1/24 静岡・毎日・読売・中日)
◆	『光技術 企業に橋渡し』浜松市では光や電子技術を使って産業振興を図る動きが進んでおり、産学官連携の要となるのがフォトンバレーセンターだ。センターは優れた技術を活用したいというニーズを企業や大学に橋渡しする役割を担っている。農業分野では2017年度、袋井市の農産物卸業者と静岡大農学部をつなぎ、光・電子技術を応用したセンサーを活用し、安定した品質のメロン栽培に成功した。	(1/23 読売)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
◆	『駿河区の人気スポット紹介』静岡市駿河区の情報発信サイト「スルマガ」で、静岡大7人と県立大2人の計9人が取材・執筆したコラム「駿学WALKER」が掲載されている。区民からの意見聴取事業でのアイデアから実現した取り組み。	(1/23 毎日)
■	『「テレビの父」生誕120年』浜松高等工業学校(現静岡大工学部)で電子式テレビの受像に世界で初めて成功した高柳健次郎は20日に生誕120年を迎える。8K放送のカメラセンサーは、高柳の精神を受け継ぐ静大生から生まれたベンチャー企業「ブルックマンテクノロジー」が開発。静岡大の中西洋一部名誉教授は「10年、20年先に目を向け、世の役に立とうとする精神は今も浜松に根付いている」と語る。	(1/20 静岡)
▲	『電子看板で生活情報』不動産会社のユノアールイーと、システム開発を手掛ける静岡大発ベンチャーのプログメイトが、集合住宅の出入り口に設置するデジタルサイネージ(電子看板)を共同開発した。「今後はタッチパネルやカメラとAIを組み合わせて、個々の入居者に合った情報を提供できる仕組みも考えたい」と展望する。	(1/19 中日)
▲	『センター試験開始』大学入試センター試験が19日、始まった。静岡県内では静岡大など21会場で実施され、志願者は昨年より244人少ない16,363人となっている。静岡大静岡キャンパスでは1,314人が受験。	(1/19,20 中日・毎日)
▲	『在日コリアンの音楽 触れて』在日コリアンの女性らによる韓国の伝統音楽パンソリの講演が22日、静岡大・大学会館で開かれる。静岡大地域創造学環の学生らが主催。	(1/17 朝日)
■	『識者談話/英国発 世界的不況の恐れ』EUとの離脱合意案の否決を受け、英政府が提出する代替案の内容が今後の焦点。劇的な案が出るとは思えず先行きは不透明。日本は輸送機器関連産業が多いため、少しずつ静岡県内経済にも影響してくることはあるかもしれない。(静岡大 安藤研一教授(経済政策))	(1/17 静岡)
▲	『時評』東日本大震災以降よく聞くようになった「想定外」という言葉の使われ方に違和感を覚えることがある。むしろ情報の整備や予測速度の向上で、一昔前より「想定しやすくなっている」面も少なくない。安易に「想定外」と言うことなく、様々な情報を生かしていきたい。(静岡大防災総合センター 牛山素行教授)	(1/16 静岡)
◆	『防災フェロー養成 受講者募る』静岡大防災総合センターは15日から、県と連携して実施する「ふじのくに防災フェロー養成講座」の2019年度受講者を募集する。同センターの牛山素行教授は「災害が起きるたび、自治体職員らの防災対応能力向上の重要性が指摘されている。本講座としても役割を更に果たしていきたい」と意義を話す。	(1/15 静岡)
●	『夢の宇宙エレベーター 僕らの力で』静岡大工学部生でつくる部活「航空宇宙技術育成部」が、地上から宇宙に人や物資を運ぶ「宇宙エレベーター」につながる技術開発に挑んでいる。技術発表の場となる競技会には今年で10年目の出場となり、主催団体からは「学部生の参加は珍しい」と注目されている。	(1/13 静岡)
◆	『性の多様性 理解深める』静岡市の清水七中は11日、セクシュアルマイノリティーへの理解を通じて、多様性への認識を深める学習会を同校で開いた。LGBTを研究する静岡大大学院生を講師に招き、全校生徒約700人が多様な性の在り方に触れた。静岡大LGBTサークル「グランディオーゼ」のメンバーらがLGBTの概要説明を通じ、性の多様性への理解を促した。	(1/12 静岡)
■	『最後の静大卒業書展』静岡大教育学部芸術文化課程書文化専攻の4年生による本年度の卒業書展が11日、始まった。書文化専攻は本年度で廃止されるため、最後の卒業書展となる。	(1/12 静岡)
■	『若者の政治参加へ提案』若者の政治参加をテーマに研究している静岡大人文社会科学部法学科の政治思想ゼミ(井柳美紀教授)が研究成果をまとめた展示会が17日まで、静岡市の同大図書館ギャラリーで開かれている。ゼミ生10人が、同大の学生300人を対象に地方政治に関するアンケートを実施。結果を基に昨年12月に行った研究発表の資料を展示している。	(1/12 静岡)
■	『平成そして-農業-/新技術・大規模経営で活路』静岡県の農業生産は、大規模経営の伸展により支えられ、先端技術も活用されている。静岡大の峰野博史教授、地元企業の㈱Happy Quality・サンファーム中山(株)らは共同で、トマトが水分と肥料を欲しがるとするタイミングで与える実験に取り組んでいる。峰野教授がトマトの葉のしおれ具合を感知するAIを開発。狙いは「農家の経験値をAIで補う」(峰野教授)ことだ。	(1/12 日経)
◆	『高部東小生 民謡学ぶ』静岡市清水区の高部東小で10日、静岡大教育学部音楽科の学生に民謡を学ぶ授業が開かれた。5年生約110人が地域に伝わる作業唄「駿河地搦唄」を学んだ。同学科で伝統音楽の講義を受講する3年生12人が指導役を務め、地搦唄の意味を解説し実際に演奏した。	(1/11 静岡)
▲	『だもんで/新元号の時代 市民が政治動かして』4月末で平成の時代が終わり、5月より新たな元号になる。私たちは新たな元号の時代の中でいま一度「政権交代のある民主主義」を機能させる経験を積んでいくことが大切であろう。政治に緊張感を持たせる最良の手段は、主権者が厳しい視線を絶やさぬ事だ。	(1/10 朝日)
■	『極小気泡の生成小型装置開発』静岡大学術院工学領域の間瀬暢之教授は、極小の流量で直径100マイクロメートル以下の気泡「ファインバブル」を高濃度で生成できる小型発生装置を開発した。多種多様な気体や有機溶媒系の液体にも対応し、医薬品や農業などとの合成、環境や医療、バイオ分野の研究・開発などへの活用が期待できる。	(1/10,23 静岡・日経)
●	『若者が創る「春の音楽祭」』静岡市のグランシップで3/10、1999年の開始から20周年となるのを記念した「春の音楽祭」が開かれる。「未来を拓く世代が創るステージ」と銘打ち、200人近くの地元の中高校生・大学生がダンスとコーラスを披露するのが目玉で、静岡大学混声合唱団のメンバーらも参加する。	(1/9 読売)
●	『12日準決勝、決勝 組み合わせ決定』第29回県U-15新人バスケットボール選手権大会は予選リーグを終え、12日に4強による決勝トーナメントがある。浜松東部と静大附属静岡戦はエース対決が勝敗を左右しそう。	(1/9 中日)
▲	『平成30年度文部科学大臣優秀教職員表彰』青山昌子(静岡大教育学部附属幼稚園)/	(1/9 静岡・中日)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
●	『第40回ジュニア県展』 【書写の部】 県知事賞:塚本萌香(静岡大附属島田中3年)／県教育長賞:田代愛実(静岡大附属島田中2年)／金賞:池田友菜(静岡大附属島田)／銅賞:岩谷美璃(静岡大附属島田) 【美術の部】 銀賞 山崎琥珀(静岡大附属静岡)／銅賞 松木美優(静岡大附属静岡)・飛田亜美(静岡大附属静岡)	(1/9 静岡)
●	『「真の国際人を目指す」と抱負』内閣府の青年国際交流事業「世界青年の船」に参加する県内の若者3人が7日、県庁に木苗直秀教育長を訪ね、今月末の出発を前に抱負を語った。参加者は静岡大教育学部3年の村埜史奈さんら3人で、「真の国際人になれるように経験を積む」と決意を述べた。	(1/8 静岡)
■	『AI見出し 超進化』人間でも困難な新聞の見出し作成を人工知能(AI)が行えばどうなるのか。中日新聞社と静岡大情報学部・狩野芳伸准教授の研究室が「AI対整理記者 見出し100本勝負」を実施した。改良型新AI「つづりん」、昨年の旧型AI、整理経験8年の記者の3者が勝負。結果、新型AI「つづりん」は100本中、9本で記者を上回った。記者は90本で両AIを上回り、旧型AIは2本で両者を上回った。狩野教授は「今後はより精密に文章の意味を取り込むことが課題」と手応えを感じている。	(1/7 中日)
▲	『それぞれの平成記/巨大地震 防災先駆けに啓発』未曾有の大災害が続いた平成の終わりに大規模地震対策特別措置法(大震法)が見直され、「地震は予知できない」となった。いま南海トラフ地震について新たな被害想定の下に、避難計画の策定が進む。静岡大防災総合センター長の岩田孝仁教授は、「静岡は防災を先行してやってきたが、『防災先進県』ではない」とみる。これからは防潮堤の整備だけでなく施設の内陸部移転など都市計画も重要になる。	(1/6 朝日)
■	『サクラエビ異変/高い海水温 成長に影響』2018年の駿河湾のサクラエビ秋漁は魚影が薄く、体長が小さすぎたため漁師たちは漁場に網を入れることすらできないまま漁期を終えた。駿河湾奥部の海水温に着目している静岡大創造科学技術大学院の鈴木款特任教授は、秋漁の惨状について「18年の駿河湾奥部の海面水温は夏場に高すぎた上に9月中旬までほとんど下がらなかった。海中で対流があまり起きず、植物プランクトンの成長に必須な栄養塩の海底からの噴き上げが十分でなかったのでは」と指摘した。	(1/6 静岡)
●	『憲法の意味 若者と考える』国際情勢が激変する中、時代を担う若者は新たな時代に日本国憲法とどう向き合っているのか。2018年12月中旬、静岡大農学部竹之内裕文教授(哲学)の司会で「憲法対話会」を静岡新聞社で開いた。野田妃稚さん(静岡大2年)をはじめ県内各地から18～20歳までの若者4人が意見を交換した。	(1/5 読売)
●	『行動できる大人になりたい/静岡・成人式 3253人門出祝う』静岡市の成人式が3日、同市のグランシップで開かれ、新成人3253人が集い、門出を祝った。式典では、渡辺愛華さん(静岡大2年)らが代表して登壇し、新成人の誓いを田辺信宏市長に述べた。	(1/4 中日)
▲	『ものづくり力 進化/県内の先端技術研究』浜松市に多くの大学や浜松ホトニクスなどの有力企業が立地し、静岡大学浜松キャンパス内の「フォトンバレーセンター」が製品開発や技術活用を支援する。肉眼と同等の色を映して手術をしやすくする内視鏡、収穫前に作物の成分を分析できるセンサーなどの開発が進む。	(1/1 読売)
▲	『師走の街角/防災 必要性伝えるには』「静岡大学学生防災ネットワーク」は防災に関する大学の講義などをきっかけに、4月に結成された。被災地でのボランティアや防災イベントへの出展、防災士などの資格取得などに精力的に取り組んできた。同団体の上田啓瑚さんは入学時に配られる防災リュックの中身について説明する動画を作成。「生活の中で防災について考える時間を少しでも生み出せたら」と話す。	(12/29 読売)
▲	『高3半数「浜松国立大」』静岡大と浜松医科大が協議を進めている国立大学法人統合と大学再編で、静岡大側が県内の高校生を対象に新しい大学名についてアンケートしたところ、浜松を拠点とする新大学名は「浜松国立大学」が全体の半数を占め、トップだったことがわかった。	(12/28 中日)
◆	『北海道の中1 静大衛星学ぶ』将来の夢に向け第一人者に会ったり関連機関で特別授業を受けたりするのを支援する北海道旭川市の事業の一環で、宇宙飛行士を目指す同市の中学1年高野晴さんが27日、静岡大浜松キャンパスを訪問した。同大工学部の超小型人工衛星の開発を主導した山極芳樹、能見公博の両教授から特別講義を受けた。	(12/28 静岡・中日)
▲	『20年度入試の変更点説明』大学入試センター試験の後継となる「大学入学共通テスト」が2020年度から導入されるのを見据え、静岡大と静岡新入試研究会は26日、県内国公立4大学の入試の変更点を説明するフォーラムを開いた。静岡大は英検やTOEICなどの英語認定試験について「加点方式にする」と説明した。	(12/27 静岡)
●	『中学年代の日本一、24チーム競う』中学年代の日本一を決めるバスケットボールのジャパンカップU-14決勝大会が開幕し、附属静岡中などが27日からの決勝トーナメントに進出した。	(12/27 静岡)
■	『津波レベル「1.5」想定を』静岡大理学部の北村晃寿教授が23日、「静岡地震津波研究のいま」と題して講演した。地球科学等の分野の研究者らを招いて最先端の研究成果を伝える「地球環境史学」の一環で、約400人が聴講。北村教授は現実的想定として「レベル1.5」の津波を揚げ、実態解明を行う必要があると提言した。	(12/25 静岡)
■	『IT技術生かし競技力を向上へ』最新のIT技術を生かして情報を分析し、競技力向上へとつなげるシンポジウム「スポーツと情報」が22日に行われ、地元の若手研究者ら300人が最新の知見に触れた。シンポジウムでは静岡大情報学部の竹内勇剛教授が講演。ラグビー高校日本代表の合宿の様子をビデオ撮影し、「ことば」を分析した結果、集団内で使う隠語が浸透すれば、意識やプレーに好影響を与えたとした。	(12/23 中日・静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
■	『教室から/英語教育のビジョン』小学校で2020年度に実施される英語の教科化。小学校の役割は中高で『互いの思いを伝えあえる対話表現』を考えるためのベース作りだ。学校においては、一部の教諭やALTに負担が偏らない息の長い取り組みが必要である。また、家庭間で差がつかないよう、公教育が機会を保障することが望ましい。保護者は即物的な会話能力を求めず、外国語という『窓』を通じた人間性の育成を期待してほしい。(静岡大学 巨理陽一准教授)	(12/21 読売)
■	『サクラエビ異変/漁獲回復の方策は?』深刻な不漁で、一度も操業せずに打ち切りとなった駿河湾のサクラエビ秋漁。持続可能なサクラエビ漁にとって、その根幹をなす「プール制」を現代的課題に合わせて見直すことが今後の課題だろう。漁業者同士の合意形成を図り、持続的な漁を行うための重要な基盤であるという利点を引き継ぎ、不漁をはじめとする現代の諸課題に合わせた運用の見直しが必要だ。(静岡大学農学部 富田涼都准教授)	(12/21 静岡)
●	『この人/松尾諒介さん』100回目の定期演奏会を迎える静岡大管弦楽団の団長、同大理学部3年。担当楽器はコントラバス。高校2年から本格的に取り組む。一本番に向けて。「節目のタイミングを団長として迎えられることに誇りを感じる。1962年から続く楽団の歴史に恥じない演奏をしたい。歴代の定演パンフや団員が綴った日誌なども展示する。これまでの歩みを振り返る機会になれば。」	(12/21 静岡)
■	『疑問リスト、宝になる』光を電気信号に変換するイメージセンサーの開発でデジタル画像の質向上に貢献したとして、2017年度に英国の「エリザベス女王工学賞」を日本人で初めて受賞した静岡大電子工学研究所の寺西信一特任教授が18日、記念講演会を行った。研究では疑問を持つ大切さを強調し、自身も「疑問リストを絶えず作っている。生涯の宝になる」と語った。寺西特任教授が開発した「押込フォトダイオード」はスマートフォン等に使われるイメージセンサーの基盤部品で、全世界で生産される年間40億個以上の内、99%以上に用いられている。	(12/20 静岡・中日)
◆	『新聞活用、地域を学ぶ』静岡大人文社会科学部と静岡新聞社は2019年度後期から、日頃の新聞記事を基に、学生が地域課題を学ぶ連携授業「地域社会と新聞」を新設する。授業は、学生田氏が新聞に親しむとともに、本件が抱える課題や解決策を考察してもらうのが狙い。日語一幸学部長は「記事を読むことで地域を知ってもらい、学んでいることと結び付けてほしい」と期待。	(12/20 静岡)
■	『コンピューターの消費電力/素子構造工夫 1/10に』静岡大学の小野行徳教授らはNTTや北海道大学と共同で、コンピューターの消費電力を1/10程度に抑える技術を開発した。数年後に技術を確立し、実用化を目指す。成果は英科学誌ネイチャー・コミュニケーションズ(電子版)に掲載された。	(12/19 日経)
◆	『賀茂地域と3大学 協定』静岡大、県立大、静岡文化芸術大と賀茂地域6市町は18日、包括連携協定を締結した。急速な過疎化に直面する中、伊豆半島南部の賀茂地域の活性化に向け教育や観光を中心に幅広い分野で協力する。	(12/19,22 静岡・読売)
▲	『第三者割当増資で4.6億円』静岡大学発の半導体会社、ブルックマンテクノロジーは凸版印刷や半導体商社の緑屋電気などを引受先とする第三者割当増資を実施した。調達額は4.6億円。イメージセンサーなどの開発費用に充てて成長を加速し、2021年に株式上場を目指す。上場すれば静岡大発新興企業では初の事例。ブルックマンは静岡大の川人祥二教授の技術を活用したCMOSイメージセンサーを事業化するために設立。現在、川人教授は会長。	(12/18 日経)
■	『ドローイング 大作など75点』静岡大教育学部教授で現代美術家の白井嘉尚さんの作品展「シャベットのよう」に、そして森のなかへ」が掛川市で開かれている。30歳から現在まで、各年代に取り組んだシリーズ作品計75点を展示。白井さんは「作品を通して色彩の力、波動、エネルギーを感じてほしい」と話す。	(12/18 中日)
◆	『静大生が松崎で小学生野球教室』静岡大野球部の学生4人が16日、松崎スポーツ野球少年団の小学生を対象にした野球教室を松崎町内で開いた。今回の教室は同大地域創造学環3年の吉沢公史さんが企画した。	(12/18 静岡)
■	『電子研究で顕著な業績/4人に奨励賞』電子科学分野で顕著な業績を上げた研究者や団体をたたえる「第32回高柳賞」の贈呈式が16日、行われた。若手研究者に高柳研究奨励賞が贈られ、静岡大工学部の仙谷哲也准教授ら4人が受賞した。	(12/17,18 中日・静岡)
◆	『障害者支援活動 ボランティア紹介』障害者支援等に取り組むボランティアの活動を紹介するイベントが開かれた。車椅子の体験ブースを運営した静岡大のボランティアサークル「AMIS」代表の同大2年足立紗彩さんは「車椅子利用者の視点を知ってほしい」と呼びかけていた。	(12/16 読売)
◆	『架空請求被害防止 静大生が啓発講座』県中部県民生活センターは架空請求被害の啓発講座研究発表会を開いた。静岡大学術院家庭科教育学研究室4年の高野瑞絵さん、河村美有さんが、自ら考案した啓発講座を発表した。	(12/16 静岡)
◆	『駿河湾フェリー 若者の声を』県は15日、2019年4月以降の運航継続が決まった駿河湾フェリーの利用促進を図るため、県内の大学生を対象にした一泊二日の伊豆半島ツアーをスタートさせた。中国人留学生で静岡大人文社会科学部の徐佳妮さんは「フェリーの利用者を増加させるには、眺望をPRするだけでなく船内で楽しめるイベントや企画を充実させるべき」と指摘した。	(12/16 静岡)
■	『SNS利用法教材に』「LINE」が静岡大教育学部の塩田真吾准教授との共同研究から生まれた教材「SNSノート(情報モラル編)」の無料配信を始めた。SNSを悪用したいじめなどのトラブル防止などが狙い。塩田准教授は「従来とは違う『怖がらせない』方法でコミュニケーションの本質を考えさせる教材。全国の学校で活用してほしい」と呼びかける。	(12/15 毎日)
●	『静大チーム最優秀賞 東海・北陸地域ブランド総選挙』大学生が地元の商品やサービスを取材し、魅力や売り出し方を提案する「東海・北陸地域ブランド総選挙」の決勝戦が12日、名古屋市の名古屋国際センターであり、「由比桜えび」を取り上げた静岡大のチームが最優秀賞に輝いた。静岡大は最優秀賞のほかプレゼン賞も受賞。四年の遠藤直弥さんは「最近はやえびが不漁だったので賞は大漁で良かった」と喜んだ。	(12/14 中日)



種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
■	『犯罪被害者支援 静大で講座』教員などを志す学生たちに犯罪被害者支援への理解を深めてもらおうと、県警の警察相談課が静岡大で出前講座を開いた。教育学部2年生約130人が参加。講座を受けた清水嶺さんは「周囲の人の心ない言葉による二次被害が、被害者やその家族にとってどれだけつらいか学べてよかった」と話した。	(12/14 朝日)
■	『裁判過程 AIで分析』静岡大学は国立情報学研究所などと共同で、人工知能(AI)を使って裁判の過程を分析するシステムの構築に乗り出した。実際の裁判は事実認定や判断に曖昧な部分が多いが、AIが判断に至るまでの法的根拠等を可視化する。共同研究は国立情報学研究所の佐藤健教授を代表に、静大の狩野芳伸准教授らが参加。文科省からの補助金を得て、21年度までに実用的なシステム開発を目指す。	(12/13 日経)
■	『熟練農家の勘 AIで再現』静岡大と中日新聞の連携講座「静岡大学の現在」が11日、開かれた。第4回目は情報学部 峰野博史教授が「人工知能が拓げる農業の可能性」と題して講演した。熟練の農家は経験と勘で適度に糖化を促すストレスを与えれば植物の糖度を管理できることを知っているが、峰野教授は、この農家の「こつ」を人工知能(AI)を使って再現しようと試みている。	(12/13 中日)
●	『100回目定演「第九」挑戦』静岡大管弦楽団は24日、100回目の定期演奏会を開く。ベートーベンの交響曲第9番「合唱付き」を披露するほか、楽団の歩みを振り返る資料の展示も行う。節目の演奏会に向けて団員たちは練習に熱を入れ、団長の松尾諒介さん(理学部3年)は「歴史に恥じない演奏をしたい」と意気込む。	(12/12 静岡)
◆	『学生が来店客に献血呼び掛け』大学生のボランティア団体などでつくる「静岡学生献血推進委員会」は9日、全国学生クリスマス献血キャンペーンを開いた。同委員会長の静岡大3年 太田智輝さんは「若年層の献血者数が全国的に減少している。学生や高校生が積極的に協力してくれたら」と話した。	(12/12 静岡)
◆	『林野火災備え連携』駿河消防署と消防航空隊は11日、静岡市消防団と静岡大との合同林野火災想定訓練を同大で実施し、各機関が連携した効果的な防御活動について検証した。周辺の林野火災などの災害対応拠点に指定されている同大野球場を活用し、消防ヘリ「カワセミ」の消火用タンクへの充水訓練も実施した。	(12/12 静岡)
■	『未来をつなぐ 国立ハンセン病療養所／静岡大生の目で提言を』ハンセン病の元患者が暮らす国立駿河療養所を今後どう地域に開放し、残していくか定まっていなかったことから、静岡大の学生が療養所の将来構想をテーマに学んでいる。ゼミを指導する人文社会科学部の山本崇記准教授やゼミの学生らが療養所で合宿をするなどして、将来構想の実現を後押しする提言をまとめようとしている。	(12/11 毎日)
■	『出生率 カギは結婚観?』女性の結婚生活での幸福度や結婚への関心度が現在と将来の合計特殊出生率に影響を与えているという調査結果が公表された。静岡大と県が合同で実施した統計調査「結婚の幸福度・関心度から見る未来への道標」で明らかとなった。	(12/11 朝日)
■	『提言/減災』政府は防災上の見地からできるだけ大規模な地震を想定し、国民の防災意識を高めたいのだから、短く想定された地震の発生時期を含め、脅しのような地震規模に基づく防災対策が住民の啓発になるのだろうか。科学的な見地に基づく、地震モデルの再検証が必要ではないか。(安藤雅孝 静岡大防災総合センター特任教授)	(12/9 静岡)
▲	『国家公務員の仕事紹介』総務省静岡行政監視行政相談センターは7日、国家公務員の仕事を紹介する出前教室を静岡大で開いた。同大人文社会科学部の専門科目「公務労働の世界」の一環。法学科の2年生を中心に約160人が受講した。	(12/8 静岡)
▲	『だもんで』卒業論文は、自身の4年間の学びの集大成と位置づけ、一年をかけて中間報告や修正を行いつつ執筆作業を継続する。提出日に研究室へ卒論を持参するゼミ生と共に私も喜びを分かち合い、ねぎらいの言葉をかける。これからもゼミ生の活躍と幸せを願い続けたい。(静岡大人文社会科学部 日詰一幸教授)	(12/6 朝日)
■	『静岡大・藤井研究室が優秀賞』優れた防災教育を表彰する今年度の「ぼうさい甲子園」で、静岡大教育学部・藤井基貴研究室が優秀賞に選ばれた。同研究室はぼうさい甲子園入賞の常連。教職を目指す学生が主体となり、「考える防災」をテーマに教材や授業の開発、実践、普及を進める。	(12/5 毎日)
▲	『時評』中華民国台湾の統一地方選で、与党民主進歩党が大敗した。従来だと中国が強権を発動すればするほど、台湾の国民は反発し、独立志向の民進党に有利な結果がもたらされていた。民進党の大敗は台湾の民主主義政治の成熟を物語っている。(静岡大 楊海英教授)	(12/5 静岡)
●	『しずおか新聞感想文コンクール』 優秀賞 中学生の部：「命を守るために」 小田 佳伶 (静岡大附属静岡中2年) ：「咄嗟の判断と行動」 安部 真唯子 (静岡大附属島田中1年) 入選 中学生の部：「気付きの第一歩」 阿部 遥 (静岡大附属島田中2年)	(12/5 静岡)
●	『静大生が司書の仕事学ぶ』静岡大人文社会科学部の学生20人が2日、司書の仕事を学ぶ実習を市立幸町図書館で行った。2年生の足立真里奈さんは自身も図書館をよく利用するといい、「図書の分類方法がより詳しく理解できた。どんな本でも探し出す自信が付いた」と話した。	(12/4 静岡)
●	『子ども環境作文コンクール最優秀作品』県知事賞：「私のクリーンアップ活動」 鈴木瑚々(静岡大附属島田中2年)	(12/4 静岡)
◆	『産学連携ビジネス紹介』「しずおか農工商連携交流会」が11/29、開かれ、静岡大の産学連携担当者が取り組みを発表した。「企業などから連携の要請があれば担当の教員を紹介している」などと話した。	(12/2 中日)
▲	『社説』大隈良典東工大栄誉教授がノーベル賞の賞金など1億円を出して設立した大隈基礎科学創生財団。この助成を受ける静岡大農学部の木村洋子教授の研究室では、酵母を使った実験に高額な装置や試薬が必要で研究費に苦労している。だが「学生は失敗するもの」と木村教授は言い、学生や院生を育てるにはやってみせ、させてみなければならぬ、それが務め、と考えているようだ。	(12/2 中日)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
●	『静大生が進路や将来アドバイス』松崎町でフィールドワークを行う静岡大地域創造学環の学生6人が29日、松崎中の3年生約40人を対象に進路や将来について考えるワークショップを開いた。大学生の講義活動内容やキャンパスライフを知ること、中学生の学習意欲向上を図ろうと初めて開催した。	(12/1 静岡)
●	『スーツで気こなし学ぶ』男子学生を対象にした就活講座「男子学生のためのプレミアムセミナー」が行われ、大学生たちがスーツの着こなしを学んだ。静岡大1年の木田和希さんは「初めて知ったことが多かった。就活が始まるまで情報を集めたい」と話した。	(12/1 静岡)
▲	『静大准教授が論文多重投稿』静岡大は30日、学術院融合・グローバル領域の准教授が二つの論文を多重投稿する不正行為を行ったと発表した。石井潔学長は「誠に遺憾。今回の事案を真摯に受け止め、再発防止に努める」とした。	(12/1 静岡)
●	『静大祭を支えた仲間たち』「第69回静大祭」が11/16～18、静岡キャンパスにて開催された。天候に恵まれ、例年より多くの来場者が見られた。裏側で支える実行委員会(JC)や取材班員の所属するサークル・団体の思いを聞いた。(取材班：人文社会科学部「地域メディア論」受講生) ・よさこいサークル「お茶ノ子祭々」よさこい演舞で会場一体 ・邦楽部 初の舞台で1年生演奏	(12/1 毎日)
◆	『寄り添う気持ち大切』県警は29日、犯罪被害者支援を考える講座を静岡大で開き、教育学部の2年生約130人が傾聴した。	(11/30 静岡)
■	『時評/安部川の流路変遷』中世以前の安部川と藁科川は海岸まで並行して流れていたが徳川家康が「薩摩土手」を築かせたことによって安部川の流路が変わり藁科川と合流したという通説があるが、静岡平野の現在の地形から考えるとそのような事実は認めがたい。県都の成り立ちに深くかかわる安部川の流路変遷が確たる証拠無しに語られている現状は好ましくない。詳細な調査が望まれる。(静岡大学防災総合センター 小山真人教授)	(11/29 静岡)
▲	『子ども取り巻く環境変化/これからの保育は?』静岡保育を学ぶ会(会長・金田利子静岡大名誉教授)は対談とシンポジウム「これからの保育を静岡で考える」を開いた。保育施設が多様化する中で求められる保育について意見を交わした。金田名誉教授は保育施設が多岐にわたる状況でも「保育関係者は異なるものを排除せずに、学び合うことが不可欠」と訴えた。	(11/29 静岡)
◆	『この人/「めぐりりアート静岡」を企画した静岡大教授 白井嘉尚さん』静岡市内の美術館と文化施設が連携し、本県ゆかりの美術家を紹介するイベントを、静岡大が中心となり2014年から開催している。13年に開かれた『むすびじゅつ』が前身。県立美術館と民間が連携し、人材を育てる試みが画期的だった。文化庁助成『アートマネジメント力育成事業』として継続しようと試みた。	(11/28 静岡)
▲	『時評/突発地震対策』歴史的にも、南海トラフで起きる巨大地震の発生パターンはかなり不規則である。震源域の半分が先に破壊した場合などに気象庁が「臨時情報」を出すことになっているが、臨時情報による混乱を回避するためにも、本来の突発地震対策の徹底が欠かせない。改めて初心に戻り地域を見直してみる。12月の地域防災訓練はそんな一日であっても良いのでは。(静岡大防災総合センター長 岩田孝仁教授)	(11/28 静岡)
◆	『赤ちゃん先生から学ぶ』赤ちゃんに触れ合っって育児体験をする「赤ちゃん先生プロジェクト」の出前授業が21日、静岡大であった。NPO法人「ママの働き方応援隊静岡校」が企画。1～2歳の赤ちゃん5人が「先生」となり、教員を目指す学生約20人が参加した。教育学部4年の吉田真綾さんは「保育実習で出会った同じ年頃の赤ちゃんとは全く印象が違った。子育て中のお母さんの経験談も聞けて、いい経験になった」と話していた。	(11/25 朝日)
●	『静岡大が早大から白星』静岡市内の高校、大学と東京六大学リーグなどの野球部による交流試合「第1回大学野球オータムフレッシュリーグin静岡」にて、静岡大が早大から価値ある1勝を挙げた。15安打と快音を響かせ、高山監督も「バットが振れていた」と納得の表情。チームも打撃8割、守備2割の配分で打撃練習に力を入れてきた。	(11/25 静岡)
●	『税に関する作品表彰/島田税務署管内』税務署長賞：井林美紀(静岡大附属島田中)	(11/25 静岡)
●	『税に関する作品 小中高生を表彰/静岡税務署管内』県静岡財務事務所長賞：加藤咲穂(静岡大附属静岡小6年)	(11/23 静岡)
◆	『高解像度のX線センサー』静岡大学発ベンチャーのANSeeNIは高解像度のX線画像を撮影できるイメージセンサーを製品化する。工業製品の検査時間を短縮できるセンサーとして2020年に発売予定。ベンチャーキャピタルなどから約3億円の開発資金を得た。	(11/21 日経)
▲	『催しの不足金巡り三島市が文書偽造』三島市が事務局を務める「三島市地域ブランド推進協議会」のイベント不足金78万円を補填するため、市がほじょきんの目的を変更して文書を偽造したり、それに合わせて市議会での答弁を訂正したりしていたことが分かった。これについて静岡大人文社会科学部の日詰一幸教授は「不透明な意思決定で手続きとしておかしい。つじつま合わせに終始している印象。透明性の高い事務手続きが求められる。」と話した。	(11/21 中日)
◆	『大学野球部若手と高校交流戦』東京六大学リーグの野球部若手や地元高校チームが交流戦「大学野球オータムフレッシュリーグ」の実行委員会が20日記者会見し、大会概要を発表した。参加するのは大学が早稲田、慶応、明治、立教、筑波、中京、静岡、東海大海洋学部、高校は静岡、静岡商、静岡市立、清水東、清水桜が丘、東海大静岡翔洋の予定。浜松南OBで静岡大3年の米沢広太郎内野手は「強豪大学との試合はめったにないのでうれしい」と意気込みを語った。	(11/21 中日・朝日)
◆	『AI台頭で「仕事再編」』読売新聞・静岡大学主催の連続市民講座「どんな時代だったのか～平成の静岡～」の最終回が開かれ、静大男女共同参画推進室の跡部千穂助教が「人口減少社会の処方箋～女性の活躍とは？男女共同参画を考える～」と題して講演し、約110人が耳を傾けた。人の仕事をAIが代わりに行う事で「仕事の再編」が起きると分析し、今後は「一人一人ができることを見つけて、自ら行動することが求められている」と締めくくった。	(11/18 読売)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
●	『こども環境作文コンクール』県知事賞：鈴木瑚々(静岡大附属島田中2年)	(11/18 静岡)
◆	『販売や科学実験/静岡大フェスタ』静岡大静岡キャンパスで17日、大学と地域が交流を深める「キャンパスフェスタin静岡」が始まった。18日まで、模擬店や科学実験などを楽しめる。学生と民間企業が共同開発したレトルト食品「恋するリゾット」の販売ブースでは、訪れた客が次々と商品を買求めた。販売担当の農学部3年、原川麻友さんは「興味を持ってくれた地域の人がたくさん買ってくれた」と笑顔を見せた。	(11/18 静岡)
◆	『研究協議会で意見共有』静岡大附属特別支援学校は16日、第45回研究協議会を開いた。小・中学部、高等部で公開授業を行い、より良い授業づくりに向け、授業後は参観者による意見交換も行った。17日は「思春期の発達障害のある生徒への指導と支援」など、各テーマに分かれた研究フォーラムを開く。	(11/17 静岡)
■	『メタンを電力に変換』静岡大と中日新聞の連携講座「静岡大学の現在」の第3回目が開かれ、グリーン科学技術研究所の木村浩之教授が「海底堆積物からの贈り物、メタン！～基礎研究から社会実装まで～」と題して講演した。メタン発電の実用化の例は川根温泉にあり、井戸から湧き出る付随ガスに含まれるメタンで発電機を動かし電力に変換。現在は種子島周辺の海洋プレートでのメタンガスの採取・利用に注目している。	(11/16 中日)
◆	『プラモデル 授業に活用/ものづくり、地場産業学』プラモデルの主要メーカーの拠点多くあり、出荷額が全国1位の静岡市は今年度、プラモデル産業をテーマに小学生向けの授業を始めた。子どもたちにもものづくりの魅力を伝え、地場産業について学んでもらうのが目的。授業は、静岡模型教材協同組合や、静岡大学教育学部の芳賀正之教授らと連携・協力して実施。	(11/16 毎日)
●	『袴田さん(静岡市立高)最高賞/高校生科学研究発表会』静岡大が開講しているグローバルサイエンスキャンパス(GSC)の受講生で静岡市立高2年の袴田彩仁さんが10月、全国各地のGSCで科学研究に取り組む優秀な高校生が参加して都内で開かれた研究発表会で、最高賞の文部科学大臣賞を受賞した。静岡大のGSC受講生で初の快挙。静岡大の瓜谷真裕教授は受賞理由について「実験量とデータ量が豊富だった。結果が出たことに加え、自分でプログラミングして色の変化を数値化するなどの工夫が評価につながったのでは」と指摘する。	(11/15 静岡)
▲	『だもんで/大学の夜間教育 より魅力あるものに』国立大学法人で「夜間主コース」を設けている大学の学部長会議が毎年11月に行われており、学部が抱える諸課題の検討や教育内容の充実などについて議論されている。静岡大では人文社会科学部のみ夜間主コースが設置されており、長期履修制度を導入する等、社会人学生の為に工夫を凝らしている。より魅力ある夜間教育の提供について、大学も学生の側に立った創意工夫を求められている。(静岡大人文社会科学部 日誌一幸教授)	(11/15 朝日)
▲	『異常現象に迅速対応』内閣府は13日、中央防災会議有識者ワーキンググループ(作業部会)の会で、南海トラフで異常現象が観測された際の防災対応の在り方について報告書骨子案を示し、大筋で了承された。12月の次回会合で報告書をまとめる予定。委員の岩田孝仁静岡大防災総合センター長は「国の情報を受けて具体的にどう行動すればいいかイメージを示さないと国民は動けない。県である程度シナリオを作った方が早い」と述べた。	(11/14 静岡)
■	『富士山成り立ち学ぶ』静岡大地域創造学環・教育学部の小山真人教授(火山学)が講演した。「火山がつくった大地を読み解く～世界遺産・富士山と伊豆半島ジオパーク」(全3回)の1回目として「富士山の成り立ちと特徴」をテーマに語り、恵みについて強調した。約40人が傾聴した。	(11/13 毎日)
◆	『静岡大と静岡市の古文書共同調査30年』静岡大学の日本史学研究室と静岡市が共同で取り組む古文書調査が30年を超えた。これまでに、旧家に眠る日記や書類など57件が学生らの手で整理、保存されてきた。静岡大の貴田潔准教授は東日本大震災で多くの古文書が流されるなどした事例を挙げ、「古文書は一度失われたら戻らない。手元にあるうちに調査し、記録することが重要」と話す。研究室は毎年11月(今年は17、18日)の大学祭で「古文書展」を開き、その年の調査結果を発表している。	(11/11 毎日)
▲	『提言/減災』7月の西日本豪雨では大変な災害が広域で発生した。避難すべきかどうかの判断の一時の逡巡が生死を分けたケースもあったと聞かすが、避難勧告が出されても即従って行動するのは躊躇されるように思われる。避難行動につなげる上で良く見知っている人からの直接の呼び掛けは大変有効だ。防災情報の生かし方について、こうした視点にもっと注意を払ってもよいのではないかと。	(11/11 静岡)
◆	『超高齢社会の自立支援は』「サンフロント21懇話会」東部地区分科会は山口建静岡がんセンター総長の基調講演、1級建築士の天野彰氏、竹林洋一静岡大創造科学技術大学院特任教授の講演に続き、「超高齢社会における自立支援の実現に向けて」と題した3氏のトークセッションを行った。「みんなの認知症学会」の理事長を務める竹林氏は「フル仕様の介護ロボット開発は時間がかかるので単機能で良い。人間の行動パターンの必要な部分をどうモデル化するかの」と未来を見据えた。	(11/10 静岡)
◆	『駿河区発信 学生が企画/登呂遺跡で文化祭』静岡市駿河区は8日、2018年度の区民意見聴取事業「区長とまちみきセッション」の最終回を開き、静岡大等の大学生が「地域資源の活用」をテーマに区の魅力を発信する事業を提案した。4回のセッションでイベントや企画を考案。登呂遺跡での文化祭や住民と協力したスタンプラリーなど、学生が主体となって地域を巻き込む事業を発表した。	(11/10 静岡)
■	『補給機、宇宙基地を出発/静大衛星「てんりゅう」実験に貢献』JAXAは8日、無人補給機「こうのとりのりゅう」7号機が同日午前1時50分頃国際宇宙ステーションから地球へ向けて出発したと発表した。静岡大工学部が開発した超小型人工衛星「てんりゅう」も相乗りし、国際宇宙ステーション(ISS)に運ばれた。てんりゅうは現在、ISSと同じ高度400キロの宇宙空間を周回している。	(11/8 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
◆	『介護にAI 開発進む』 介護の分野でも、人工知能(AI)の活用へ向けた開発が盛んになってきている。国立病院機構東京医療センターでは、フランスで生まれた認知症ケア技法「ユマニチュード」を、AIを活用して介護者に教えるシステムを導入した。静岡大発のベンチャーなどが2017年に合併して誕生した「エクサウィザーズ」(東京)が手掛けている。また、静岡大の竹林洋一特任教授らは17年11月、AIを使いながらより良い認知症ケアを研究する「みんなの認知症情報学会」を設立し、皆で学び合い、認知症になっても安心して暮らせる社会を目指す。	(11/7 読売)
◆	『恋するリゾット 静大生考案』 学生目線で商品を考案する静岡大のサークル「静大FooD」と山梨缶詰(静岡)が共同開発したレトルト食品「恋するリゾット」が完成し、同大で5日、石井潔学長との試食会が開かれた。トマトメインの「ラブラブな恋」リゾット、カボチャメインの「メロメロな恋」リゾット、ホウレンソウメインの「キラキラな恋」リゾットの三種類を考案、2017年から同社と約30回の試作を重ねた。静大FooD代表で、農学部3年の原川麻友さんは「学生が明日も頑張ろうと思える商品を目指した」と笑顔で語った。	(11/6 静岡)
●	『少年少女国連大使・鳥光さん/貧困問題の現状報告』 日本青年会議所主催の「JCI JAPAN少年少女国連大使」として、スイス・ジュネーブとフィリピン・マニラを今夏訪問した静岡大附属静岡中3年の鳥光結月さんがこのほど、同校で全校生徒と教職員計約500人に活動の成果を報告した。鳥光さんは7~8月に大使として活動。マニラではスラム街の視察を通じ、貧困問題への考えを深めた。	(11/6 静岡)
◆	『児童 楽しみながら学ぶ/静大生講師にプログラミング』 ICT教育に力を入れている川根本町の町立中央小は5日、静岡大生を講師に招いたプログラミング教室を同校で開催した。情報学部3年の栗原啓志さんら6人が、5年生11人に教え、栗原さんは「なぜこの指示で四角形が描けたか分かるかな」などと問いかけ、プログラミングの仕組みに対する理解を促した。	(11/6 静岡)
◆	『「リケジョ」の魅力紹介』 静岡大は3日、女子中高生に理系の魅力を伝えるシンポジウム「女性研究者と話そうー薬学部志望からバイオ工学に出会うまで」を同大浜松キャンパスで開いた。シンポジウムは、女子中高生の理系進学を支援する同大のプロジェクト「理系女子夢みつけ★応援プロジェクトinしずおか」の一環。静岡大工学部に通う女子学生との交流会も行われた。	(11/4 静岡)
▲	『静岡大一般入試 募集要項を発表』 静岡大は2日までに、2019年度一般入試の学生募集要項を発表した。募集人数は前期日程1035人、後期日程490人の計1525人で、全入学定員の約77%を占める。要項は同大静岡キャンパス入試課で配布。ホームページなどからでも請求できる。	(11/3 静岡)
●	『家康公作文コンクール/小中学生の力作審査』 ▼浜松市長賞/白須湖々美(静大附属浜松中1年) ▼県商工会議所連合会会長賞/中村京我(静大附属浜松中3年) ▼SBS静岡放送賞/武田桃子(静大附属静岡小2年)	(11/3 静岡)
◆	『秋の叙勲/輝く県内関係受章者』・番場 公雄 静岡大学名誉教授 ・細谷 泰茲 静岡大学名誉教授	(11/3 静岡・中日・朝日・日経)
◆	『大学研究者が中小企業支援/"浜松版"産学連携』 光・電子技術を活用した産業を支援するフォトンバレーセンター(浜松市中区)は、製品開発や既存事業の高度化に課題を抱える中小企業を大学の研究者がサポートする新たな取り組みを開始した。10月に県西部の製造業などの6社を選定し、静岡大や浜松医科大などの研究者と課題解決を図りながら製品化や事業化を促進する。	(11/3 静岡)
■	『「あおい」交信一進一退』 静岡大工学部は1日、10/29に打ち上げられた3機目の超小型衛星「Stars-AO」(愛称あおい)の交信状況を明らかにした。29日深夜に前2機に比べて強いモールス信号を受信でき、関係者を喜ばせたが、その後信号停止モードになったため、発信させるコマンドの送信を続けているという。	(11/2 静岡・朝日)
▲	『本音インタビュー/静岡大学生支援センター・宇賀田栄次准教授』 静岡大を卒業後、民間企業の人事担当等を経て現職。ふじのくに地域・大学コンソーシアムインターンシップ推進委員長。新卒の入社後の定着のためには学生と企業の相互理解が必要。大学1、2年からインターンシップなど企業との接点を深める機会作りを進めることで、学生と企業のミスマッチ解消につながる、と話す。	(11/2 静岡)
▲	『時評/風水害は、いつ集中?』 夜間は「寝込みを襲われる」など災害対応を阻害する要因がいろいろと考えられるが、夜の災害ばかりを警戒するのも適切ではない。「無理な行動をとりやすい」など昼には昼の怖さがある。自然災害には様々な姿があるが、特定の事例に基づく「教訓」ばかりに目を向けるのではなく、広い視野から考えることが重要である。(静岡大防災総合センター・牛山素行教授)	(11/1 静岡)
▲	『製造業の人材確保へ』 静岡COC+連携協議会(事務局・静岡大)は10/31、製造業の人材確保策と学生の就職動向を探るシンポジウムを開き、パネル討論や企業内定者の登壇、基調講演などが行われた。	(11/1 静岡)
●	『ない通信/温泉水活用 トマト栽培』 焼津市内の温泉旅館の若女将、望月美佐さんが挑戦しているのは温泉水を使った「温泉美人トマト」の栽培。静岡大名准教授で静岡アグリビジネス研究所の糠谷明さんの指導のもと、事業としてトマト栽培を実現させた。糠谷さんによると「温泉水には肥料になる以外のものも入っていて、トマトがストレスを感じる。そのストレスを排除しようとトマトが自分で作り出すもののひとつがおいしさのもととなるグルタミン酸」だという。	(10/31 読売)
▲	『キャリア教育を拡充』 県内の経済団体や大学などで組織する「しずおか産学就職連絡会」は30日、会合を開き、経団連による就職活動ルールの廃止について意見を交わした。静岡大も1、2年生向けのキャリア教育を充実させ、地域社会との接点創出に取り組むとした。	(10/31 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
■	『静大衛星あおい 宇宙へ』静岡大工学部が開発した宇宙観測用の超小型人工衛星「あおい」(Stars-AO)が29日、温室効果ガス観測衛星「いぶき2号」を搭載したH2Aロケット40号機に相乗りして鹿児島県の種子島宇宙センターから打ち上げられ、宇宙空間に放出された。JAXAが配信した打上げの映像を、同学部の学生らが同大浜松キャンパスで見守った。	(10/29,30 中日・静岡・読売)
●	『豊かな音響かせ 静岡大銀賞受賞』第66回全日本吹奏楽コンクール・大学の部が27日行われ、東海支部代表として県内から静岡大が出場。16回目となる今回は銀賞を受けた。団長の片山莉緒さん(4年)は「全員でお城を建てるイメージで練習してきました。冒頭のクラリネットのソロが落ちていて決まったことで、みんなの気持ちが高まって、いい演奏ができました」と満足な様子だった。	(10/28 朝日)
▲	『人・ひと/宇宙に挑み続ける静岡大工学部教授 能見公博さん』6日に宇宙に放出された超小型衛星「STARS-Me」は分離されて2つになる衛星の内、一方の信号の受信に成功したがもう一方は不調。「『はやぶさ』も通信途絶になりながらも帰還した。我々も宇宙エレベーターに向けた実験を諦めちゃいけない」と研究室の学生を励まし続ける。「自分たちが作った衛星が宇宙で作動する感動を学生たちに味わわせたい」と、休む間もなく挑戦を続ける。	(10/27 朝日)
▲	『この人/アスリートの倫理教育に取り組む静岡大教育学部准教授 藤井基貴さん』スポーツの道徳的葛藤に着目した「アスリート道徳」の講座を実施し、健全なアスリートの育成を研究する。防災教育の分野では教材を開発し、県内各地の小中学校で授業を展開した経験がある。	(10/27 静岡)
▲	『制度設計は年度内に』静岡大と浜松医科大は26日、法人統合と大学再編による1法人2大学制への移行を検討する第3回連携協議会を静岡大静岡キャンパスで開いた。当初は最短で2018年内に可否を決定するとしていた法人統合・大学再編の制度設計について、18年度内(19年3月末)にずらす方針を確認した。	(10/26,27 静岡・中日)
▲	『女性議員 低迷12%/打開へ増員活動や支援金』年内の市議選、町議選が全て終わり、県内の女性議員は合わせて87人となった。議員定数に占める割合は11.9%と全国的にみても低い。静岡大の日詰一幸教授(行政学)は「政治は『男社会』という雰囲気強いが、子育てや介護といった女性の目線が大事な政策課題は多い。女性の首長や議員が連携して意識の啓発に取り組むなど、女性が政治を身近に感じられる活動が必要だ」としている。	(10/25 読売)
■	『駿府城「幻の城」歴史的価値、今後は』駿府城発掘調査で、豊臣秀吉が中村一氏に築かせた城の遺構が見つかった。家康を脅威に思っていたからこそ、豊臣勢力の最前線である駿府に金箔瓦の城を築かせたのだろう。さらに掘れば、家康5カ国時代の城や今川館の痕跡が見つかるだろう。(小和田哲男静岡大名学教授)	(10/25 静岡)
▲	『だもんで/秋の夜長に「考古学」のスヌメ』日本考古学協会静岡大会が20~22日に開催された。県内では静岡大が唯一、考古学を学ぶことのできる大学となっており、今後も県内における考古学の教育・研究の拠点として重要な役割を担い続けていくはずだ。	(10/25 朝日)
▲	『農業系専門職大学 開学へ』より高い技術と経営マインドを持った農林業の担い手育成を目指し、県は全国初の農業系専門職大学(名称:県立農林環境専門職大学)を2020年4月、磐田市に開学させる予定で準備を進めている。学長予定者は静岡大の鈴木滋彦副学長。現場主義者で木質バイオマスなど新分野に明るく、留学生の誘致に手腕を発揮したことなどが起用の理由。	(10/25 朝日)
■	『森林限界 10年で1メートル上昇』静岡大が1978年から10年毎に継続している富士山の森林限界付近の定点観測が40年目を迎え、学生らの大規模調査が行われた。これまでの調査で森林限界が10年毎に約1メートル上昇していることが分かっており、同大の増沢武弘客員教授は「森林限界はいずれ、日本の他の高山帯と同様に標高2800メートル付近、それ以上まで上昇する」と予測する。	(10/24 静岡)
▲	『女性研究者と交流』静岡大は11/3、シンポジウム「女性研究者と話そうー薬学部志望からバイオ工学に出会うまで」を同大浜松キャンパスで開く。女子中高生の理系進学を支援する同大のプロジェクト「理系女子夢みつけ★応援プロジェクトinしずおか」の一環。理系女子大生や女性研究者との交流会も予定。	(10/23 静岡)
▲	『自転車ツーリズム 地域、観光振興議論』道路を舞台にした地域振興と観光振興を討論するフォーラム「日本風景街道大学・しずおか校」が20、21日の両日、静岡大などで開かれた。日本風景街道に登録されている全国のルートに関わる行政や活動団体、自転車愛好家など約150人が参加した。	(10/23 静岡)
■	『考古学の研究成果発表/30年ぶり静岡で大会』日本考古学協会静岡大会が20日、静岡大で始まった。同協会は1948年に登呂遺跡の発掘調査を契機に設立。今年は70周年に当たることなどから、静岡市の開催が決まった。	(10/21 静岡)
●	『考える防災 英語で実践』災害時、日本語を話せない外国人にどう正しい情報を伝えるか。静岡大付属浜松小で、英語教育と防災教育を融合した新しい授業が始まっている。全国でも先進的試み。	(10/21 静岡)
●	『「アスリート道徳」静岡大企画し講座』静岡大教育学部の学生による「アスリート道徳」の講座が18日、開かれた。児童10人がサッカーをする上で「良い選手とは？」をテーマに話し合い、お互いが持つ価値観について学んだ。講座は同学部の藤井基貴准教授の研究室に属する学生が企画、実施した。	(10/20 静岡)
■	『静岡研究者2人が選ばれる』次世代を担う若手研究者に贈られるマツダ財団の研究助成の対象に、ともに静岡大工学部機械工学科の有田祥子助教と中澤謙太助教が選ばれた。18日、同大浜松キャンパスで贈呈式が開かれた。助成額はそれぞれ100万円。2018年度は全国で440件の応募に対し37件が採択された。	(10/19 中日)
▲	『学び合う場 機会創出を』第35期県社会教育委員会(委員長・阿部耕也静岡大教授)は17日、今後の社会教育の在り方をまとめた報告書を木苗直秀教育長に提出した。今後の社会変化への対応として、世代や立場を超えた学び合いや認め合う場、機会創出の必要性を提言した。阿部委員長は「学校教育とは違った特徴がある社会教育の可能性を感じとってもらえればうれしい」と話した。	(10/18 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
●	『静岡大、中学生が“体験”』静岡大は17日、中学生がキャンパスライフを体験する大学見学会を、同大静岡キャンパスで開いた。袋井市立浅羽中学校の3年生10人が授業や学食を体験した。情報基盤センター長の井上春樹教授の授業では、人型ロボット「ペッパー」も講師として参加し、AIの発達による社会の変化の見通しを示した。同大は今後随時、中学生の見学会の依頼を受け付けるとしている。	(10/18 静岡)
●	静岡学生野球秋季リーグ【バストナイン】一塁手：米沢広太郎(静岡大3年) 指名打者：杉村育真(静岡大3年)	(10/18 静岡)
■	『勢力誇示 家康VS秀吉』駿府城に、豊臣秀吉の家臣・中村一氏が築いた「幻の城」があったことが16日、わかった。家康、秀吉が、駿府城を舞台に互いの勢力を誇示し合っていた当時の状況が浮かび上がった。静岡大の小和田哲男名誉教授は、「一氏時代の駿府城については遺構もなく、『幻の城』とされていた。発見の意義は大きい」と話	(10/17 読売)
■	『人口減社会の学校 議論』日本教育行政学会は13日、公開シンポジウム「持続可能な地域コミュニティと学校システムの模索」を静岡大で開いた。静岡大大学院教育学研究科の武井敦史教授は「学校は教育や地域の核となるほか、防災拠点になるなど多様な機能がある」と指摘し、学校再編について「教育委員会単独や自治体の一部局だけでの対応は困難だ」と課題を述べた。	(10/14 静岡)
▲	『静岡発こう読む/台風と停電』9/30～10/1にかけて静岡県内を襲った台風24号の影響で、県内各地は大規模な停電に見舞われた。復旧にも時間がかかり、市民生活にも大きな影響が及んだ。しかし静岡県内では大規模地震の発生が想定されていることもあり、各家庭での災害時の備えはある程度できていたと想定される。実際に備えが災害発生時に機能するのか、再確認が必要だが、今回はその良い機会になったはずだ。(静岡大教授 日詰一幸)	(10/14 中日)
▲	『静岡ひと/地域情報 学生目線で50号』県内の大学生が取材や執筆を行って、地域の魅力を若者に発信するフリーペーパー「静岡時代」。10月で50号となる同誌の発行責任者を務めるのが鈴木智子さん(静岡大大学院人文社会科学研究科に在籍)。「多くの人に直接会って、地域の魅力を伝えるのが雑誌の特徴です」と話す。	(10/14 読売)
●	『静大附属静岡中で教育研究協議会』静岡大附属静岡中は12日、教育研究協議会を開き、10教科の授業を公開した。県内の教育関係者や静大の学生や約400人が参加し、各授業で主体的に考えながら学びを深める生徒の様子を見学した。静岡大教職大学院の村山功教授は「『教科ならではの文化』から見た資質・能力とその育成」と題して講演	(10/13 静岡)
◆	『プラモ完成に達成感』静岡市周辺に集積するプラモデル産業の魅力を伝える特別授業が10日、市内の小中学校で行われた。プラモ離れが進む子ども世代にファンになってもらおうと、市・静岡模型教材協同組合・静岡大が初めて実施。	(10/12 中日)
■	『デング熱の型 迅速判別』静岡大グリーン科学技術研究所の朴龍洙教授らの研究グループが11日、デング熱の原因となるデングウィルスの種類を迅速に判別する方法を開発したと発表した。4種類あるウィルスの型を数分程度で見分ける新手法で、世界初。朴教授は「早期に型を判別することが流行を食い止めることにつながる」と語る。	(10/12 静岡)
◆	『教員とALT連携を』西伊豆町教委と英語教育の共同研究を進める静岡大教育学部の巨理陽一准教授のゼミ学生が11日、町立賀茂小を訪れ、英語の授業を見学したり、模擬授業を実践したりした。英語を担当する教員が抱える課題などを探り、指導方法の改善案を学校に提言した。意見交換会では巨理准教授が「発音や正しい文脈より簡単な英単語を使い続けることが大切。英語を楽しませ、好奇心を生み出すのが重要」と指摘した。	(10/12 静岡)
■	『静岡大・中日新聞連携講座/カイコ活用しバイオ工場』静岡大と中日新聞の連携講座「静岡大学の現在」が9日行われ、同大グリーン科学技術研究所の朴龍洙所長が「カイコは素晴らしいバイオファクトリー」と題して講演した。カイコに遺伝子を注入すると「絹糸用のタンパク質を作る」という遺伝子情報を、「別のタンパク質を作る」というものに変えてしまうことができる。抗体、ヒト酵素、成長因子、インターフェロンなど、さまざまなタンパク質を生産することが可能。	(10/11 中日)
▲	『「大学の強み伸長が鍵」人口減時代の教育議論』ふじのくに地域・大学コンソーシアムは10日、シンポジウム「静岡県の大学の将来像を探る」を開いた。パネル討論にて石井潔・静岡大理事長は、静岡大と浜松医科大学が検討を進める法人統合と大学再編について、「高齢社会の中で、(静岡大は)医療や看護などの分野で弱点がある」と狙いを語った。	(10/11 静岡)
●	『プロ目指す右腕 山崎(静岡大)』静岡学生リーグ、静岡大の右腕山崎智也が、大学4年間の集大成として秋季リーグ戦で好投を見せている。プロ志望届を9/20に提出し、「国立大(出身)でもできると示したい」と挑戦心を新たにマウンドに立つ。	(10/10 静岡)
▲	『静大に法曹実務家派遣』静岡大人文社会科学部と早稲田法科大学院は9日までに、静大の学部での講義の際に早大側から元裁判官や元検察官、弁護士の実務家教員などを派遣してもらう教育連携に関する協定を締結した。静大同学部では国内とのこうした連携は初。早大法科大学院としても同様の教育連携は静大が最初という。人文社会科学部の小林道生教授は「早大との教育連携は静大の教育の質を一層向上させる可能性を秘めている」と話した。	(10/10 静岡)
■	『てんりゅうの信号受信』静岡大工学部能見研究室の超小型衛星「STARS-Me」(愛称てんりゅう)の実験で、浜松キャンパスの地上局でも7日午後9時過ぎ、衛星が発するモールス信号を受信した。当初浜松キャンパスで受信が不調だったのは、地上局のアンテナの衛星軌道の予測(周波数追尾)がずれていたのが原因と考えられるという。	(10/10 朝日)
■	『「てんりゅう」宇宙に放出』静岡大工学部が開発した超小型人工衛星「てんりゅう」が6日、国際宇宙ステーションの日本実験棟「きぼう」から宇宙空間に放出された。開発主導者の能見公博教授の研究室に属する学生たちは、てんりゅうの放つモールス信号の受信に浜松キャンパスで挑んだが、信号をとらえることはできなかった。他県のアマチュア無線家から同大に「信号受信」の報告が入っていることから、能見教授は「てんりゅうが電波を出しているのは確か。静大で受信できなかった原因を突き止める」と話した。	(10/7,8 静岡・中日・朝日)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
●	『センサー開発競争 活発に』読売新聞・静岡大主催の連続市民講座の第4回目が6日行われ、同大電子工学研究所の川人祥二教授が「静岡発の次世代テレビジョンをつくる！～次世代イメージセンサーの開発と企業化～」と題して講演し、約110人が耳を傾けた。センサーに情報処理機能を加えた「CMOS(シーモス)イメージセンサー」は人間の目に限りなく近づいているという。	(10/7 読売)
●	『新聞@スクール/教育ルネサンス・学年主任』学年主任はその学年をうまくまとめるのが役割だ。気配りが重要なポイントで、業務を簡単にマニュアル化できない難しさがある。しかし学年で足並みをそろえるのと遅くまで一緒に働くのは別次元の話。ちょっとした声かけなどで働きやすい環境作りに貢献できるのではないか。(静岡大 武井敦史教授)	(10/6 読売)
◆	『テレビ電話で遠隔授業』地域間で生じる「教育格差」を是正しようと、最新の通信技術を活用し地方の学校と都会の企業をつなぐ遠隔授業に、静岡大などのチームが取り組んでいる。実践の第一弾として、静岡市内の山間部にある小学校で5日、ソニーが協力したプログラミング授業があった。授業は、静岡大教育学部の塩田真吾准教授が代表を務める一般社団法人「プロフェッショナルをすべての学校に」とソニーが共同で実施。遠隔授業は今後実施校を増やしていく。	(10/6 中日)
▲	『休校、LINEで知った/保護者らルール化望む』今回の台風による停電は、浜松市内の小中学校の約半数ほどに及んだ。学校の危機管理マニュアルにない想定は、教育現場を動揺させた。静岡大防災総合センターの岩田孝仁教授は、「電力会社も市民も大規模な停電が起こりうるという意識が希薄で、情報確保に問題が起きた」と指摘した。	(10/5 中日)
●	『小中学生の書道作品審査』第62回JA共済県小・中学生書道コンクールの審査会が4日、行われた。【条幅・金賞】田代愛実(静岡大附属島田中2年)、見城菜々子(静岡大附属静岡小5年)	(10/5 静岡)
●	『留学生ら 決意新た』静岡大の秋季入学式が4日、同大浜松キャンパスで開かれた。同大が県内企業や自治体と連携してアジア諸国の人材育成を図るアジアブリッジプログラム(ABP)の第4期留学生らを中心に、学部生33人、大学院生88人が新たな一歩を踏み出した。	(10/5 静岡)
◆	『アート使って幼児教育』静岡大学発のベンチャー企業、スプレーアートイグジン(浜松市)が、絵画を使って脳を活性化させる認知症ケアの手法を幼児教育にも広げている。全国の保育施設の協力を得ながら、子ども向け絵画の開発を進めている。	(10/4 日経)
▲	『だもんで/割れた地方票 国民の声を謙虚に』9/20に自民党総裁選が行われ、安倍晋三首相が石破茂元幹事長を退け、3選を果たした。今後も安倍政権は継続し、憲政史上最長の政権になるかもしれない今、国民の声を謙虚に聞き、批判に対しても真摯に自らを正す姿勢が求められる。今後の統一地方選・参院選も安倍首相自身が国民の思いに寄り添う事ができるかどうかによって変わる可能性もある。(静岡大 人文社会科学部 日詰一幸教授)	(10/4 朝日)
▲	『時評/生態壊す無謀な開発』ウズベキスタンのアラル海の湖水はかつて世界第4位の湖水を誇っていたが、今や元の1/6まで縮小し、地球上における最悪の環境破壊の事例として注目されている。社会主義ソ連が主導した開発が原因とされるが、かつての調和と繁栄を取り戻すため、ウズベキスタンにはアラル海の生態回復に取り組んでほしい。(静岡大 楊海英教授)	(10/3 静岡)
▲	『静大内に「憩いの場」』静岡大は1日、改修工事を進めていた同大教育学部B棟学生控室の完成記念セレモニーを同棟前で開いた。同大教育学部美術教育専修の学生らがデザインを考え、学生後援会が支援して改修が実現。同大の丹沢哲郎理事は「多くの人の協力のおかげで憩いの場、教育活動の拠点として素晴らしい空間ができた」と話した。	(10/2 静岡)
●	『静岡大工学部の土屋さん最優秀』浜松市などは29日、今夏に地元企業のインターンシップに参加した大学生らの成果報告会を開いた。各発表の審査も行い、最優秀賞は市内工場で生産管理を学んだ静岡大工学部3年土屋尚輝さんが受賞した。優秀賞には広報プロモーション会社で学んだ同大人文社会科学部2年好田俊哉さんが選ばれた。	(9/30 静岡)
●	『新聞読み意見交換』静岡大、県立大の学生有志と静岡新聞社は28日、新聞を読みながらニュースへの理解を深める「新聞カフェ」を県立大で開いた。学生計12人が大学の枠を超え、時事問題について自由に意見を交わした。	(9/29 静岡)
◆	『取引先で留学生実習』しずおか信用金庫はこのほど、静岡大の留学生らを対象としたインターンシップを初めて実施した。中国とベトナムからの留学生3人が同信金の取引先企業で実習を積み、海外展開の可能性や外国人が働きやすい職場環境づくりを考えた。	(9/29 静岡)
▲	『時評/防災の冗長性 徹底を』北海道胆振東部地震ではブラックアウトの緊急事態となった。95年の阪神・淡路大震災の教訓から、防災に必要な最低限のものに加えて一定の余力や重複した仕組みを持ち重大事態を回避する「リダンダンシー(冗長性)」の考え方を導入するようになったが、近年効率化を求めるあまりこの考えが忘れられてしまったのではないか。今一度、各事業者はしっかりチェックし、改善事項を確実に実行する必要がある。(静岡大防災総合センター長/岩田孝仁教授)	(9/27 静岡)
●	『静大生と米の奏者/心地よいジャズ披露』ニューヨーク在住のテナーサックス奏者ルー・タバキンさんと静岡大スタンダードハーモニージャズオーケストラ(SSH)のコラボレーションライブが26日夜、開かれた。	(9/27 静岡)
●	『県内6人準大賞/第17回岐阜女子大全国書道展』書道展賞：見城菜々子(静岡大附属静岡小5年)	(9/26 静岡)
◆	『麻機遊水地合同で清掃』静岡市内にある東海大、常葉大、静岡大、県立大の環境サークルが23日、合同清掃活動「うちちしぞ〜か☆エコアクション2018」を、同市葵区の麻機遊水地で行った。4大学の学生と応募で集まった約70人が、地元をきれいにしようとおみ拾いに精を出した。	(9/25 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
■	『このとり打ち上げ/静大浜松キャンパス喜び』 静岡大工学部が開発した超小型人工衛星「てんりゅう」などを搭載した無人補給機「このとり」7号機がH2Bロケットで国際宇宙ステーション(ISS)へ向けて打ち上がった23日午前2時52分、同大浜松キャンパス(浜松市中区)でインターネット中継を見守った開発主導者の能見公博教授らは「無事に打ち上がり、ほっとした」と喜んだ。	(9/24 静岡・中日・朝日)
●	『9条改正 不安の声/浜松で聞く』 今回の自民党総裁選の結果について、浜松市の有権者に聞いた。静岡大情報学部1年の男性は「増税になるのは困る、景気が悪くなり、就職活動に影響が出るかも」と心配そう。一方、大学院へ進学予定の同大工学部4年の大関幸也さんは「安倍さんで良かった。景気が悪くなって、今後の週活に響いたら嫌です」と三選を歓迎。同大大学院1年の大倉雄志さんは「あくまでも自民党の中の話なので、どちらになろうと、何かが大きく変わる気はしない」と話した。	(9/21 中日)
●	『静岡大の山崎がプロ志望届提出』 静岡大学生野球リーグ、静岡大の山崎智也投手が20日、全日本大学野球連盟にプロ志望届を提出した。山崎は最速145キロの本格派右腕。	(9/21 静岡)
■	『魚類の生殖巣に悪影響』 静岡大創造科学技術大学院の徳元俊伸教授の研究室は、内分泌かく乱物質「ビスフェノールA」が魚類の生殖巣に悪影響を与え、同様の異常が4世代にわたって受け継がれることを実証したと発表した。同研究室は人間にも同様の影響が起こりうるとし、がんなどの病気の原因になっている可能性もあると指摘する。今後は影響が出る量や、原因解明などの研究を進める。	(9/20 静岡)
■	『ノロ 高感度で検出』 静岡大グリーン科学技術研究所の朴龍洙(パクヨンス)教授らの研究グループが、ノロウイルスを高感度で検出する方法を開発した。早期診断や調査などへの活用が期待できる。朴教授によると、今回開発した方法は従来約100倍の感度が見込めるといい、「ノロウイルスの感染力は非常に強い。早期診断ができれば拡散が防げる」と話した。	(9/19 静岡)
▲	『静岡発こう読む/ポートランドから学ぶこと』 日本のまちづくり関係者の間で、米国オレゴン州ポートランドがちょっとしたブームになっているようだ。「人間」と「環境」を重視したまちづくりが注目を浴びている。単にポートランドの取り組みを模倣するのではなく、まちづくりの理念やプロセスを学ぶことではないか。(静岡大 日誌一幸教授)	(9/16 中日)
●	『留学生ら 正装で巣立ち』 2018年度静岡大の秋季学位記授与式が14日、浜松キャンパスであり、15カ国の卒業・修了生89人が新たな一歩を踏み出した。留学生制度「アジアブリッジプログラム(ABP)」の2期生33人も含まれる。	(9/15,17 中日・朝日)
●	『よさこい踊りで活気』 静岡大のよさこい踊りサークル「お茶の子茶々」は16日、静岡市清水区でよさこいイベント「良さ来い! 茶ノ国祭り」を開いた。同祭り実行委員長の同大農学部3年、吉村陸さんは「よさこい祭りが県内でさらに広がり、地域の活性化につながれば」と話した。	(9/16 静岡)
■	『衛星「てんりゅう」宇宙行きお預け』 静岡大工学部が開発した「STARS-Me(愛称・てんりゅう)」が載せられた、無人補給機「このとり」7号機の打ち上げがバルブ異常のため打上げが延期された。打ち上げ中継をスクリーンで見ようと集まっていた関係者は延期の一報を受け苦笑したが、工学部の能見公博教授は「打ち上げに失敗するよりはよい」と話した。	(9/15,16 中日・静岡)
◆	『企業誘致へ四つの提案』 静岡大で副専攻に「地域づくり」を選択する2年生15人が10～12日で伊豆市を訪れ、地域づくりフィールドワークと題した2泊3日の実習に臨んだ。人口減少対策につながる企業誘致の方策について考えた。副専攻は所属する学部・学科を越えて学ぶ制度。「地域づくり」のコースでは静岡市や浜松市でも実習を実施している。	(9/14 静岡)
■	『液体に触れず粘度測定』 静岡大工学部の犬塚博教授が、液体に触れることなくその粘度を測る新しい手法を開発した。医療分野や食品・化粧品の品質管理分野での応用が期待される。6月末に特許を出願。	(9/14,15 静岡・中日)
◆	『静岡市5大学が災害防災の講座』 静岡大を含む静岡市内の5大学の教員が「災害・防災」をテーマに講義する市民大学リレー講座「災害と向き合う」が22日、開講する。	(9/14 静岡)
▲	『岩田氏(静岡大防災総合センター長)ら大臣表彰』 2018年の防災功労者防災担当大臣表彰式が13日、都内で開かれ、岩田孝仁静岡大防災総合センター長らが表彰を受けた。表彰者を代表し岩田教授が「それぞれの分野でさらなる研さんと努力を重ね、被害の軽減に尽力していく」と謝辞を述べた。	(9/12,14 静岡)
●	『動物の絵コン審査』 県内の園児・児童が描いた第37回どうぶつの絵コンクールの審査会が12日、開かれた。審査委員長の白井嘉尚静岡大教授ら6人が賞を選んだ。白井教授は「動物に対する驚きや感動が作品を通じて感じられた。子どもらしくのびのびと描いた作品が目に残った」と話した。▽県私学協会会長 宮地優和(静大附属静岡小2年)	(9/13 静岡)
▲	『だもんで/知られざる大学教員の夏休み』 日本の大学は改革の渦中に置かれ、将来ビジョンに基づき着々と成果を上げていくことが求められている。夏休みといえど学内行政に時間を割くことも必要となっており、地域連携への貢献もまたしかりだ。大学教員は、このような状況の中であえいているというのが私の偽らざる実感である。(静岡大学人文社会科学部教授 日誌一幸)	(9/13 朝日)
▲	『司法試験1525人合格/静岡大は2人』 法務省は11日、2018年司法試験に最年少の19歳を含む1525人が合格したと発表した。静岡大の合格率は15.38%(2人)だった。	(9/12 静岡・朝日・読売)



種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
■	『静岡発 私の提言/AIの限界を見据える』AIが人間並みの会話をするには世界の理解、身体感覚、人間関係など必ずしもデータに含まれない情報が必要で、過去の会話を集めるだけでは不十分である。将来の職業を考えると、また現場で技術を生かそうとするときには、こうしたAIの限界を見据えることが必要だ。現時点の情報を踏まえ、技術の可能性と限界を把握し、課題の本質を理解し、適切な判断を下す必要がある。(静岡大学情報学部准教授 狩野芳伸)	(9/11 日経)
◆	『伊豆の魅力 学生探る』大学生が伊豆地域の魅力や課題を探るツアー「若旅IN伊豆」が10日、同地域で始まった。参加者の静岡大3年の田中啓介さんは「このツアーを今後の進路選択に役立てたい」と話し、同大3年の森田紗永さんは「人や地域のために働くことに魅力を感じる。今回の経験を踏まえて就職活動に取り組みたい」と話した。	(9/11,12 静岡)
■	『静大教授が素数ゼミ特徴解説』静岡大理学部は市民向け講座「サイエンスカフェin静岡」を開き、同大工学システム工学科の吉村仁教授が「素数ゼミの謎－進化物語の科学」と題して講演した。素数ゼミは13年に1度、また17年に1度大発生する不思議なゼミ。	(9/9 静岡)
■	『顕微鏡で知るナノの世界』静岡大と中日新聞の連携講座「静岡大学の現在」の第1回「ナノフォトニクス最前線～レーザーが拓くナノテクノロジー～」が開かれる。講師を務める工学部・川田善正教授は、「工学は静岡大が力を入れている分野でもある。少しでもいろいろな方に興味を持ってもらえると嬉しい」と話した。	(9/7,13 中日)
●	『静大、救助ロボ 初の受賞』静岡大浜松キャンパスのものづくりサークル「静岡大学ロボとファクトリー」が第18回レスキューロボットコンテストで優勝に相当するレスキュー工学大賞を初受賞し、6日に同キャンパスで関係者に報告した。安藤啄朗部長は「練習を重ねた成果が出た。後輩は連覇を目指して」と期待した。	(9/7 静岡)
◆	『つり橋でパチリ「インスタ映え」』川根本町と静岡大の学生が連携し、同町の塩郷のつり橋に自動写真撮影システムを設置しようとして取り組んでいる。観光客に利用してもらい、街の魅力発信につなげる狙い。ふじのくに地域・大学コンソーシアムのゼミ学生等地域貢献推進事業の一環。同大情報学部3年の村手涼雅さん、坪井祐磨さん、同大学院2年の恩田康平さんらが実用化に向けてシステムの動作確認等を行っている。	(9/7 静岡)
▲	『未明の発生へ備えを』北海道で起きた最大震度7の地震では、震源に近い場所の広範囲で典型的な表層崩壊が起きた。静岡県内でも日本平のある有度丘陵(静岡市)などが類似の地形だといえる。普段から自分が住む地域の特性を知り、注意することが必要だ。また、夜中に発生する地震を想定した対策、停電が起こる可能性への対処なども必要である。(静岡大防災総合センター長 岩田孝仁)	(9/7 静岡)
◆	『最先端研究分かりやすく/静岡大・中日新聞連携講座』静岡大と中日新聞の連携講座「静岡大学の現在」が今月から来年1月にかけての毎月1回、同大浜松キャンパスで開かれる。講座の開講を控え、石井潔学長に、狙いや今後の大学教育の展望を聞いた。	(9/6 中日)
●	『レーシングカー 学生が性能競う』「第16回全日本学生フォーミュラ大会」が4日、開幕した。県内からは静岡大をはじめ3校4チームが参加する。	(9/5 中日)
■	『留学生 初の受け入れ』静岡市は4日、留学生のインターンシップを初めて受け入れた。静岡大人文社会科学部2年のチャン・トウイ・ズオンさんが7日までの4日間、男女参画・多文化共生課と市国際交流協会で業務を体験する。	(9/5 静岡・中日)
■	『経済教室/「情報の時代」の未来』・データ取引の実現へ情報銀行などの構想がある・プライバシーの関連コストが取引に影響する・データの価値認識で個人が誤った判断をする場合もある(静岡大准教授 高口鉄平)	(9/4 日経)
◆	『地元企業の地域貢献学ぶ』静岡大生が地元企業の魅力を知る就業体験が3日、始まった。学生5人が企業訪問や金融の講義を通じて中小企業の業務や地域課題に理解を深める。2年の坂野泰暉さんは「企業が長い目で地域貢献に取り組む大切さが分かった」と話した。	(9/4 静岡)
●	『「ITキッズ」を育成』IT分野に強い子どもたちを育てる「浜松ITキッズプロジェクト」の開講式が静岡大浜松キャンパスで開かれ、市内の小学3年生24人が参加した。プロジェクトは市や静岡大、民間企業でつくるNPO法人浜松ソフト産業協会などによる推進会議が主催し、今年で7回目。来年3月までの間、ホームページの作成技術やITに必要な英語、算数、理科の知識を学ぶ。	(9/3 中日)
◆	『高校生と防災課題分析』松崎町で防災をテーマにフィールドワークを行っている静岡大地域創造学環の学生3人が1日、県立松崎高校の生徒4人とワークショップを実施した。同大3年の太田智輝さんは「訓練の運営側の視点を持つことで新たな考えや意見が生まれる。町民の人たちと防災避難訓練の計画内容を一緒に考えていきたい」と話した。同大防災総合センターの原田賢治准教授は「町の課題や実情を知る高校生と議論することで、その地域の将来に適した防災の在り方を探ることができる」と強調した。	(9/3 静岡)
●	『静大・ヤマハ 全国へ』第73回東海吹奏楽コンクールの「大学の部」が2日、行われ、最優秀の朝日新聞社賞に静岡大が選ばれた。10月に兵庫県で行われる全日本吹奏楽コンクールに出場する。	(9/3 朝日)
◆	『「大合併」西・中部で進む』読売新聞・静岡大学が主催する連続市民講座「どんな時代だったのか～平成の静岡～」の第3回講座が1日、開かれた。同大の西原純名誉教授が「平成の大合併・地方版総合戦略と静岡県自治体」と題して講演し、約130人が傾聴した。	(9/2,15 読売)
◆	『介護にAI活用へ』AIやITの開発・利活用を推進して認知症ケアの研究・普及を図る「みんなの認知症情報学会」(理事長・竹林洋一静岡大創造科学技術大学院特任教授)の第一回年次大会が同大浜松キャンパスで1日、始まった。	(9/2 静岡・中日)
◆	『地域人材育成へ包括連携』県内の大学や県・市町などでつくる「ふじのくに地域・大学コンソーシアム」と静岡県内の経済4団体が学術振興や産学官連携による地域活性化を目的にした包括連携協定を結んだ。コンソーシアム理事長の石井潔静岡大学長らが県庁で行われた調印式にて協定書を交わした。	(9/1,2 静岡・日経・中日)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
◆	『温泉水でトマト 女性だけで』焼津市の温泉旅館の若女将・望月美佐さんが始めた温泉水で作る高精度トマト栽培が、男女共同参画社会づくりで知事褒章を受けた。望月さんは2011年から静岡大の助言を受けながら最適な栽培方法を探り、16年に新規就農認定を取得。	(9/1 朝日)
▲	清水署は30日、静岡市清水区由比の海上で見つかった遺体が行方不明になっていた静岡大生の松戸芳史さんと判明したと発表した。同大石井学長は3人の遺体が見つかったことを受け、ホームページで再発防止を目指すコメントを発表。注意喚起のメールを学生に送信し、来年の新入学制オリエンテーションで海の事故への注意を呼び掛けることを再発防止策の一つとしている。	(8/30,31 静岡・中日・朝日・日経・毎日・読売)
◆	『学生が交通指導員に』静岡市生活安心安全課のインターンシップ実習生が29日、「1日市交通指導員体験」に臨んだ。静岡大3年の小林みなみさんから2人が参加した。小林さんは「最近、自転車と歩行者との事故の話題をよく聞く。ルールは守らなければと実感した」と語った。	(8/30 静岡)
▲	沼津署は28日、沼津市沖で見つかった遺体の身元を、静岡市駿河区の海岸で行方不明になっていた静岡大2年の松村俊和さんと特定したと発表した。	(8/29 静岡・中日・朝日・日経・毎日・読売)
◆	『静岡大・読売講座 詳報/火山 防災と観光両立へ』読売新聞と静岡大が主催する連続市民講座「どんな時代だったのか～平成の静岡～(全5回)」の第2回講座が4日、開かれた。同大地域創造学環の小山真人教授が「静岡の大地が語る言葉を読み解く～世界遺産・富士山と伊豆半島ジオパーク～」と題して講演した。	(8/29 静岡)
▲	静大生男女3人が行方不明になった事故で、静岡南署は25日、後藤英奈さんの遺体が駿河区広野の海岸で見つかったと発表した。	(8/26,27 静岡・中日・朝日・日経・毎日・読売)
▲	『教えて！狩野先生/AIを知る夏期講習/背景の知識が必要』AIが言葉の意味を人間のように理解するのは当面難しい。文法や表面に現れる意味だけではなく、文章全体の意味や背景知識を加味する必要があり、難しい課題である。(静岡大情報学部 狩野芳伸准教授)	(8/27 中日)
▲	『教えて！狩野先生/AIを知る夏期講習/AI 正解考えよう』AIが進化する中でそれを使う側になれば強い。「何に使えるのか」「正解は何か」を考えて活用を。人間と同じように話せるAIをつくるのが、究極の目標。(静岡大情報学部 狩野芳伸准教授)	(8/26 中日)
●	『そろばん優秀者表彰』県珠算協会などは24日、第54回そろばんの日の式典を開き、珠算、暗算で優秀な成績を収めた者や珠算・暗算にまつわる作文・詩コンクールの受賞者計472人を表彰した。受賞者代表の静大付属静岡中1年の植田智結梨さんは「続けられたのは仲間と切磋琢磨してきたから。これからも精進したい」と力強く語った。	(8/26 静岡)
▲	『教えて！狩野先生/AIを知る夏期講習/多くうそ AI見抜け』対話システムの性能を向上させるため、人気の「人狼ゲーム」をプレーするAIを作成している。多くの高度な技術が必要だが言葉の解釈は至難の業。仲間を装った相手のうそを見抜くには多くの壁がある。(静岡大情報学部 狩野芳伸准教授)	(8/25 中日)
▲	『AIが正体探り合い』誰がうそをついているか探り合う心理ゲーム「人狼ゲーム」を人工知能(AI)同士で戦わせる「第四回人狼知能大会」が横浜市で開かれた。大会の運営に主導的な役割を果たした静岡大 狩野芳伸准教授が自然言語部門の研究者として登壇し、「音声や表情、しぐさを実装して、より人間らしいAIがつかれるようになれば面白い」と将来的な展望を話した。	(8/25 中日)
▲	『教えて！狩野先生/AIを知る夏期講習/AIの自動運転』自動運転や自動対話などAIの実用化が注目されているが、道路の状況や過去の会話、世界中の知識といった膨大なデータを集められるのか課題もある。(静岡大情報学部 狩野芳伸准教授)	(8/24 静岡)
■	『水害対策考える』「第23回水シンポジウムinふじのくに・沼津」が23日、開かれた。発生から60年の節目を迎える狩野川台風と水害対策をテーマにパネル討論や、防災や地質の専門家による基調講演を通じ、水との付き合い方について考えた。パネル討論は、岩田孝仁静岡大教授ら6人が参加し、水害対策について意見を出し合った。	(8/24 静岡)
■	『水素工ネ 先進地めざせ』静岡県内で次世代水素エネルギーの先進地を目指す動きが活発化してきた。静岡大学の木村浩之教授は温泉水の中の微生物を使い、下水汚泥などから水素を生成する装置を開発。今秋から実証実験に乗り出す。	(8/24 日経)
●	『静岡学生野球秋季L25日開幕/新生静岡大 旋風を誓う』静岡大はOBの高山慎弘新監督が就任。デザイン変更したユニホームは「伝統」と「最先端」への思いがこもる。新指揮官は「野球エリートはいないが、集団でまとまって知恵を絞れば有名大学とも対等に戦えることを証明したい」と地方国立大の旋風を誓う。	(8/23 静岡)
▲	『海岸で静大生3人不明』23日、静岡市駿河区高松の海岸で、静大生3人が行方不明となっている。警察と消防は3人が高波にさらわれた可能性があるとして、現場付近の捜索を始めた。	(8/23,24 静岡・中日・朝日・日経・毎日・読売)
▲	『教えて！狩野先生/AIを知る夏期講習/AI 画像できた』最近AIが脚光を浴びるようになったきっかけは、深層学習(ディープラーニング)でうまく画像認識できるようになったこと。ただ画像と違って言語は複雑で、圧倒的に難しいです。(静岡大情報学部 狩野芳伸准教授)	(8/23 中日)
▲	『教えて！狩野先生/AIを知る夏期講習/AI ギャップあり』AIはコンピューターの発展とともに歴史があり、「人間に近いことをさせたい」と研究されてきた。「何でもできる」とイメージされがちだが、現実とのギャップは大きい。(静岡大情報学部 狩野芳伸准教授)	(8/22 中日)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
■	『AIや情報学活用 認知症ケアを発表』人工知能(AI)や情報学を活用した認知症ケアの研究・普及を図る「みんなの認知症情報学会」(理事長・竹林洋一静岡大創造科学技術大学院特任教授)は9/1、2の両日、第1回年次大会を静岡大浜松キャンパスで開く。初日は静岡大発AIベンチャー「エクサウィザーズ」の石山洸社長の基調講演をはじめ、地域包括ケアシステムの構築を考える討論会などを行う。	(8/22 静岡)
■	『静大衛星 愛称「あおい」/星空撮影、高速で送信』静岡大は21日、同大工学部が開発した高度600キロから星空を撮影する宇宙観測用の超小型人工衛星「Stars-AO(スターズエーオー)」を同大浜松キャンパスで公開した。JAXAが2018年度中に打ち上げるH2Aロケットに相乗りして同衛星の軌道に放出する。愛称を「あおい」と決めたことも発表した。開発を主導した能見公博教授は「通信速度の高度化は他の大学衛星開発にも応用でき、技術構築につながる」と狙いを説明し、「子どもたちが理科や宇宙に興味を持つきっかけにしたい」とも意気込んだ。	(8/22 静岡・朝日・読売・中日)
▲	『教えて！狩野先生/AIを知る夏期講習』AIを研究している静岡大情報学部の狩野芳伸准教授に、紙面で講習会を開いてもらった。「AIとは、人間の知能でできることをコンピューターにやらせようこと。一口に「AI」と言っても幅が広い。どの部分を自動化したいかという目的によって、どんなAIになるかが違ってきます。」	(8/21 中日)
▲	『自由な教室懐かしむ』静岡市の小中学校で教壇に立ち、絵本「教室はまちがうところだ」などを出版した蒔田晋治さんの没後10年を記念した夏のセミナーが19日、開かれた。妻芳枝さんら家族と静岡大の平野雅彦客員教授ら教え子が登壇し、在りし日を振り返った。	(8/21 静岡)
◆	『体液、汁、墨でお絵描き』静岡大の教員や学生らで作る「書と生き物愛好会」は18、19日、ワークショップ「知って、作って、暑さに勝とう！アメフラシ、文たのし」を同大で開いた。幼児から中学生までの子どもとその保護者ら計約30人が参加。軟体動物の体液や植物の汁、墨汁を使って文字や絵を描き、うちわを完成させた。	(8/21 静岡)
●	『静大とリトアニア交流のハーモニー』リトアニアの女子大学生らで作る合唱団「ベニ・ガウデーレ」が静岡大浜松キャンパスに招かれ、地元の合唱団と合唱交流を行った。合唱交流は、静大と同国の大学との学術交流がきっかけ。	(8/20,21 読売・静岡)
▲	『静岡発こう読む』名古屋の丸栄、浜松の松菱百貨店や西武百貨店など、社会や人々の消費行動に対応できず撤退をした百貨店は多い。百貨店は多くの人々にとってさまざまな思いがあると思うが、「閉店」という言葉を聞くまで私たちはそれに無頓着である。ネットで簡単に買い物ができる便利な時代になったが、売り手との会話をしながらその思いを感じて買い物をする楽しさを思い出すことで、百貨店や個店の魅力を再発見することにつながるように思う。(静岡大 日誌一幸教授)	(8/19 中日)
●	『県学生音楽コンクール入賞者』【ピアノ部門】小学校高学年：長野欽(静岡大付属浜松小6年)、中学生：大石真子(静岡大付属島田中3年)、二橋亮輔(静岡大付属浜松中3年)	(8/19 静岡)
■	『西日本豪雨に緊急研究費』文科省は17日、西日本豪雨による被害の実態・発生要因を明らかにし、今後の防災に役立てるため、大学などの研究チームに調査研究費3470万円を交付すると発表した。静岡大など各地の大学のほか、研究所等計19機関が参加する。	(8/18 静岡・中日)
◆	『焼津への愛インスタに』県内の学生らで作るNPO法人わかものまち(焼津市)は、写真共有アプリ「インスタグラム」に投稿する写真コンテスト「焼津インスタフォトコンテスト」を初開催し、作品を募集している。NPOの活動の1つ「やいばる写真部」が企画。写真部長で静岡大地域創造学環2年の久保山健太さんは「撮影や写真の閲覧を通じ、焼津の隠れた魅力に気づいてほしい」と話した。	(8/18 静岡)
◆	『長期有償でインターン』大学や自治体、企業団体でつくる「静岡COC+連携協議会」(事務局・静岡大)はこのほど、学生たちが県内企業で一定期間働きながら、仕事への理解を深める「戦力補強型長期有償インターンシップ」を始めた。学生を受け入れたクレディセゾン東海支社では静岡大3年の伊神翔央汰さんが営業活動に取り組み、「会社で行われている実務を体験できる貴重なチャンス」と話す。同大学生支援センターの宇賀田英次准教授は「企業は社員の手が回らない仕事を学生に手伝ってもらえる。最終的な人材確保につながれば」と語る。	(8/16 静岡)
■	『大雨特別警報「理解」47%』西日本豪雨時に発表された大雨特別警報の意味を正しく理解していた人は半数以下だったとする調査結果を、静岡大の牛山素行教授がまとめた。牛山教授は「気象や災害についての研究が進み、住民に向けて発信する情報がより詳しく細くなった結果、逆に、自体の緊急性が伝わりにくくなった可能性がある。受け手への伝わりやすさを重視し、発信する情報を整理すべきだ」と話している。	(8/14 読売)
▲	『提言/減災』気象庁は従来陸上で記録された地震波を用いて津波情報を緊急に発表していたが、津波の規模を小さく見積もってしまう恐れがあるため、現在は津波の大きさを直接測れる津波計が採用されている。東日本大震災後に北海道から房総にかけて網目状に津波計と地震計が設置され、それ以前にも紀伊半島と四国東部の沖、静岡沖に津波計など精密機器が設置されている。しかし四国西部から与那国島までのエリアには津波計は1点もない。地震津波の研究も重要であるが、まずは全国の津波観測網を完成させるのが優先されるべきであろう。(静岡大防災総合センター 安藤雅孝客員教授)	(8/12 静岡)
◆	『静大生、空襲の記憶紹介』静岡平和資料センターで11日、静岡大教育学部の学生が小学生に戦争の悲惨さを伝える「大学生と学ぶ静岡空襲」が行われた。地域の児童約10人と保護者らが参加し、空襲を学んだ学生の話に耳を傾けた。	(8/12 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
◆	『学生取材、SNSで発信』静岡大と由比港漁業協同組合はこのほど、特産の桜えびの魅力を広めるための取り組みを共同で始めた。学生が漁協などへ取材し、写真共有アプリ「インスタグラム」で発信するほか、新商品のアイデアなどを提案していく。10日に行われた学生の初取材では、同大教育学部の4年生3人が同漁協の豊島伸二販売課長に桜えび漁の歴史や漁獲の現状、販売の課題などについて質問。遠藤直弥さんは「食の魅力を中心に漁にまつわるストーリーなども発信していきたい」と意気込む。	(8/11,12 静岡・中日)
●	『IT企業の仕事体験』静岡市内のIT企業4社が1日ずつ就業体験の学生を受け入れる「ワンウィークインターンシップ」を行った。最終日の10日は学生が成果報告を行った。参加した静岡大理学部3年の望月麻衣さんは「同じIT業界でも仕事の幅は広く、必要なスキルが異なると知った」と感想を語った。	(8/11 静岡)
●	『スイス、フィリピン訪問 討論や視察 成果報告』日本青年会議所主催の「JCI JAPAN少年少女国連大使」としてスイス・ジュネーブとフィリピン・マニラを訪問した静大付属静岡中3年の鳥光結月さんが記者会見し、現地での活動を報告した。鳥光さんは「世界が平等でないことにずっと疑問を感じてきたけど、NGOなど国連以外にもさまざまなアプローチがあることを知ることができた」と話した。	(8/10 静岡・中日)
■	『だもんで/過去と現代が凝縮 魅せる「まち」』私のゼミでは「まちづくり」をテーマに、日本各地の取り組みを学んでいる。今年の夏合宿では、金沢市を訪問した。金沢市と静岡市は人口、街の成り立ちが似ており、比較がしやすい。金沢市のこれまでのまちづくりは、コンパクトな中にも過去と現代が凝縮され、それが「魅せるまちづくり」になっていると感じた。静岡市にも金沢市に引けをとらない素材がたくさんある。それらを生かしたまちづくりに挑戦することを期待したい。(静岡大 日詰一幸教授)	(8/9 朝日)
▲	『時評』中国はウイグル人やモンゴル人に対し、公権力によって逮捕監禁し、拷問や虐待を施している。国連は1948年12月に「ジェノサイド条約」を制度化し、人道に対する犯罪を防ごうと努力してきたが、常任理事国の中国はその責任を完全に放棄している。ここに国際社会の不条理が認められるが、日本は隣人として中国の暴走を止める工夫が必要であろう。(静岡大 楊 海英教授)	(8/8 静岡)
■	『県内4大学の研究内容紹介』静岡科学館る・く・るは8日、静岡県内にある大学の研究に触れられる行事「るくるdeオープンラボ」を同館で開く。静岡大・静岡理工科大、東海大、県立大の4大学から理科系の研究室や研究者らが参加し、日頃の研究内容を分かりやすく紹介するブースを開設する。参加者は研究者や大学生に直接質問することもできる。	(8/7 静岡)
◆	『小中生、英語力養う』小中学生がALT（外国語指導助手）らと英語のみで一日を過ごす「イングリッシュキャンプ」が6日、始まった。静岡大の学生6人がボランティアとして活動をサポートした。	(8/7 静岡)
▲	『噴火リスク 無視から直視へ』読売新聞と静岡大学が主催する連続市民講座「どんな時代だったのか～平成の静岡～」の第2回講座が4日に開かれ、同大地域創造学環の小山真人教授が「静岡の大地が語る言葉を読み解く～世界遺産・富士山と伊豆半島ジオパーク～」と題して講演し、約170人が聴講した。小山教授は、富士山と伊豆東部火山群は、噴火リスクが無視された時代と直視された時代に分類できると指摘した。	(8/5 読売)
▲	『地域の特性知り豪雨災害に備え』静岡地方気象台は4日、防災気象講演会「豪雨災害に備える」を開いた。静岡大防災総合センターの牛山素行教授が「地域を知り、防災を考える」と題して講演した。牛山教授は「災害によって避難の仕方は異なり、単純化した正解はない。避難場所を固定せず、地域の災害特性を知っておくことが大切」と訴えた。	(8/5 静岡)
◆	『地域ブランド「総選挙」/地元学生SNS発信』経済産業省の関東、中部、近畿各経済産業局と特許庁は8月から「東海・北陸地域ブランド総選挙」を開催する。7県で地域団体商標に登録されている食材や料理、工芸品など18件について、地元大学生が取材し、魅力をSNSで発信する。学生たちは12月の決勝戦に向け、商標を活用した新商品や新しいビジネスの提案にも挑む。静岡大の学生は「由比桜えび」を担当する。	(8/4 静岡)
◆	『CNF産業推進 富士市が新構想』富士市は、新素材「セルロースナノファイバー」(CNF)の産業集積を目指すCNF関連産業推進機構の策定に着手した。2日、市内に専門家を招いて構想策定会議を開き、関係者ら10人委員を委嘱。会長に静岡大 青木憲治特任教授を選出した。	(8/4 毎日)
■	『死者・行方不明者53%屋内で被災』7月の西日本豪雨による死者・行方不明者の5割超は屋内で被災していたとする調査結果を、静岡大防災総合センターの牛山素行教授がまとめた。岡山県倉敷市の洪水被害などで、建物自体は流出しなくても、屋内にいて被災したケースが多かったためとみられる。	(8/3,6 朝日・中日)
▲	『異常気象 崩れた常識』記録的な豪雨、連日の猛暑、本州を東から西に逆送する台風など、7月は異常気象を体感する事態が続き、死者、けが人も相次いだ。今後もさまざまな条件が重なって発生する異常気象に直面し続けることになりそうだ。静岡大防災総合センターの牛山素行教授は、「被害に遭うことも遭わないことも偶然にすぎない。『今まで大丈夫だった』という誤った成功体験は捨てて、『自然は怖い』という基本に立ち返るべきだ」と訴えた。	(8/2 中日)
▲	『時評』2017年8月、南海トラフ沿いの大規模地震の予測可能性に関する調査部会は、「現行の地震防災応急対策が前提としている確度の高い地震の予測はできない」とする報告をまとめた。気象庁は「南海トラフ地震に関連する情報」の運用を開始したが、これには大規模地震対策特別措置法にもとづく警戒宣言とのリンクが盛り込まれていない。私たちは警戒宣言が出されなくなった時代を生きていることを認識し、自助の意識を高めなければならない。(静岡大防災総合センター 小山真人教授)	(8/2 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
◆	『防災社会へ教育が重要』静岡大防災総合センター長の岩田孝仁教授の講演「減災から防災社会へー地域防災の現場から」が7/31、開かれた。約100名が参加し、災害時の心構えや備えの重要性について学んだ岩田教授は「まれにしか遭遇しない災害を具体的にイメージできるかが災害対策の鍵になる」と強調し、防災教育の重要性を訴えた。	(8/2 静岡)
●	『自分の遺伝子を観察』静岡県内の高校生を対象にした静岡大の公開講座「遺伝子の世界を見てみよう」が1日、静岡キャンパスで始まった。高校生20人が参加し、頭髮や爪の細胞からDNAを抽出したり、オワンクラゲのタンパク質を組み込んで発行する大腸菌を作ったりする実験に取り組んだ。	(8/2 静岡)
▲	『時評』7月に西日本一帯を襲った記録的な大雨は200人を超える犠牲者を出すなど、平成に入って最悪の豪雨災害となった。気象庁は強い警戒を呼びかけていたが、どこまでその真意が国民に伝わっていたか疑問である。一遍の呼び掛けだけでは危機感はまず伝わらない。首相や気象庁長官が自ら緊急会見をするぐらいの行動を示すなど、国民に危機感を伝えることが重要である。(静岡大防災総合センター長 岩田孝仁教授)	(8/1 静岡)
▲	『インタビュー 平成と私』平成は災害面ではどんな時代だったのか。阪神・淡路大震災の発生で昭和の防災対策はゼ口から総点検を迫られた。東日本大震災でも平成に造った部分が崩れた防潮堤があり、平成になっても実は余力を無くしている例が少なくない。次の時代の防災には、個人の危険察知能力を高めることはもとより、時代に合ったコミュニティを作ることも求められる。(静岡大防災総合センター長 岩田孝仁)	(7/31 静岡)
●	『静岡の思い出語る』ポーランドのワルシャワ市から静岡市を訪れていた日本語学校の学生9人が30日、小長谷重之副市長を訪ね、静岡での生活について報告した。学生は24～30日、市内にホームステイをし、静岡大などで授業に参加したり日本文化の体験を行った。同市への訪問は、静岡大卒業生がワルシャワ日本語学校で講師を務めている縁で、2010年から毎年行っている。	(7/31 静岡)
■	『学校再編は喫緊の課題』一定以上の学校規模を維持する場合、2030年度までに少なくとも県内の小学校を113校、中学校42校を減らす必要があるとの調査結果を静岡大教職大学院学校組織開発領域の研究チームがまとめた。代表で同大学院の武井敦史教授(教育経営学)は、「公共施設の維持管理の財政負担、教育効果を維持するための児童生徒数、地域コミュニティへの影響などの多様な視点を踏まえ、各自自治体が長期的な視点に立って小中学校の在り方を見直す時期が来ている」と語った。	(7/30 静岡)
◆	『宇宙服着て科学に関心』藤枝市教育委員会は28日、科学体感イベント「フジエダ☆コスモキッズラボ」を市生涯学習センターで開いた。JAXAや静岡市科学館る・く・る、静岡大教育学部などが協力し、科学に関する多彩な企画が用意され、多くの親子連れなどでにぎわった。	(7/29 静岡)
■	『福島で「徳川みらい学会」』徳川時代を振り返りながら会津藩の歴史資源を見つめ直す「徳川みらい学会in会津」が27日、福島県会津若松市で開かれた。福島市や静岡市などから約360人が参加し、学会会長で静岡大名誉教授の小和田哲男氏が「会津藩祖・保科正之」と題して講演し、「正之は会津藩主として幕府への忠誠心を強く持つ必要性を感じており、それが藩の家訓(かきん)に反映されている」と述べた。	(7/28 静岡)
■	『静岡衛星「てんりゅう」9月11日打ち上げ』地上と宇宙ステーションをケーブルでつないで人や物資を運ぶ「宇宙エレベーター」構想の実現に向け、静岡大工学部が開発した超小型人工衛星「てんりゅう」について、国際宇宙ステーション(ISS)への打上げが9月11日の見通しとなったことが27日、関係者への取材で分かった。	(7/28,29 静岡・朝日)
▲	『法学 ICTで遠隔授業』静岡大地域法実務実践センター(恒川隆生センター長)と中央大法科大学院、県弁護士会は26日、情報通信技術(ICT)を活用した遠隔授業などによる法学教育の充実と発展を目指した連携協定を結んだ。静岡大の法科大学院は15年度までで学生募集を打ち切り、16年4月にセンターを創設。恒川センター長は「これまでの活動で得た知見や経験を生かし法曹の魅力伝える」と意気込んだ。	(7/27 静岡)
●	『先輩社会人に相談』静岡大は26日、今夏のインターンシップに参加する3年生133人を対象に事前研修会を同大で開いた。静岡商工会議所と同市の募集で集まった地域の「社会人メンター」35人との相談を通じ、インターンシップに向けた目標を設定した。同大学生支援センターの宇賀田栄次准教授は「インターンシップへの参加自体が目的化し、成果が十分に得られない学生も多い。相談を通じてははっきりと目標を立て、参加前後の自身の変化を感じてほしい」と述べた。	(7/27 静岡)
●	『アジア留学生8人 東海澱粉が奨学金』東海澱粉は25日、静岡大を含む県内に留学しているアジアの大学院生への奨学金授与式を同社で行った。	(7/26 静岡)
▲	『論点/カジノ解禁を考える』カジノを含む統合型リゾート(IR)実施法が成立した。カジノ解禁という賭けは、日本社会にとってどうなのか。来場者が日本人中心の場合、海外の胴元が勝ち、国民は貧しくなる。するとカジノ利用が減り、税収も減る。国政に携わる人々は無責任なものを自治体に押し付けるべきではない。少なくとも住民自身が真の経済効果とリスクを見極め、カジノ開設について最終判断できる仕組みを作るべきだ。(静岡大教授 鳥畑与一)	(7/25 毎日)
▲	『教員の多忙解消へ議論』静岡大大学院教育学研究科附属教員養成・研修高度化推進センターは、高度な教育実践力を身につけたリーダーの育成が目的の「気概塾」を開き、学校における働き方改革をテーマに議論を交わした。同センター長の武井敦史教授は「仕事への思い入れから、つい頑張りすぎてしまう。意識改革が必要」などと助言した。	(7/24 静岡)
◆	『「経営と哲学」学生に』静岡銀行の中西勝則会長が23日、静岡大で「経営と哲学」をテーマに講義した。地元企業人らが交代で講師を務める、同大と静岡経済同友会の連携講座「地域社会と企業活動」の最終回。中西会長は学生に対して、「勇気を持って自らの夢へ果敢に挑戦してほしい」とエールを送り、しっかりとした考え方や気概を抱き、変化の速い時代に立ち向かうことを期待した。	(7/24 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
▲	『光医学の人材育成/共同大学院開設式典』静岡大と浜松医科大が本年度からスタートさせた博士課程の大学院「光医学共同専攻」の開設記念式典が23日、浜松市で開かれた。式典であいさつした静大の石井潔学長は「イメージング技術を中心とした光技術を医療に応用し、工医学の研究推進と高度専門人材の養成を進めていく」と強調した。両大学によると、光医学を専門とする大学院は全国初。3年間の課程を修了すると、両大学連名の「光工学博士」が授与される。	(7/24 静岡・中日)
▲	『3分野の専門委 設置』静岡大と浜松医科大は23日、法人統合と大学再編による1法人2大学制への移行を検討する連携協議会の初会合を浜松市で開いた。議論の進め方や検討軸尾を協議し、3分野の専門委員会を設置して具体的な協議に入ることを決めた。会合は非公開。次回は9月に開催する予定。	(7/24 静岡・朝日・中日)
●	『静大など3団体 東海大会出場へ』第59回吹奏楽コンクールの大学の部が22日開かれた。静岡大学吹奏楽団が朝日新聞社賞・県教育長賞を受賞。▽大学の部【金賞】静岡大学吹奏楽団	(7/23 朝日)
■	『伊豆半島の動きを説明』しずおか防災コンソーシアムは21日、ふじのくに防災学講座を開いた。静岡大理学部講師の三井雄太氏が「かつて南からやってきた伊豆半島は、今どう動いているのか？」をテーマに講演した。「伊豆半島南部は、まとまって西に動いている」と分析結果を明らかにした。	(7/22 静岡)
▲	『静岡発こう読む』西日本豪雨は各地で甚大な被害をもたらした。復旧活動に大きな力を発揮するのがボランティアである。復旧活動の促進と被災者への慰めと励ましを与えることができる意味でもその活動は大切だ。活動に赴く際は自己完結型のボランティア活動を心掛けることが大切で、復旧の目的が立つまでボランティアの支援が不可欠だということも覚えておきたい。(静岡大教授 日誌一幸)	(7/22 中日)
■	『賛否拮抗、若者は積極的』静岡大と早稲田大などでつくる研究チームがこのほど、県内の有権者を対象に「外国人労働者受け入れ」をテーマにした世論調査を実施した。調査はタブレット端末で回答する最新の手法を用いた。受け入れ賛成派と反対派は拮抗し、若年層は受け入れ賛成に積極的な傾向がみられた。調査に参加した静岡大人文社会科学部の井柳美紀教授は「労働力不足が深刻になる中、外国人労働者の受け入れは全国的に重要なテーマ。賛否は拮抗しているが、若年層が受け入れに積極的であることは注目すべき」と話している。	(7/20 静岡)
■	『静岡地域学会 28日に発表会』静岡地域学会は28日に一般公開の研究発表会を開く。静岡大の西原純名誉教授が「産業リストラクチャリング期の長崎県三菱高島炭鉱閉山と地域社会」、他2名がそれぞれ講演する。	(7/20 静岡)
▲	『民間施設分棟「利点最大」』静岡市役所清水庁舎の移転建て替えについて議論する新清水庁舎建設検討委員会(委員長・日誌一幸静岡大人文社会科学部部長)は19日、2018年度第2回会合を開いた。市は庁舎整備への民間参入について、敷地内に庁舎と民間施設を別に建設する分棟方式が最も利点が大きいとする当局案を示した。	(7/20 静岡)
▲	『静大、浜医大再編を歓迎』静岡大と浜松医科大が7月下旬にも協議を始める法人統合を伴う大学再編について、鈴木康友浜松市長は19日の記者会見で「ぜひ推進を。行政として最大限のサポートをしていく」と述べ、再編構想の実現を後押しする考えを示した。	(7/20 静岡、朝日)
▲	『静大、浜医大 再編協議/研究や教育活性化へ』静岡大と浜松医科大が連携協議会を設置し、大学再編を含めた法人統合に向けて7月下旬から本格的な協議を始める。少子化による競争激化に先手を打ち、機能強化にかじを切る。両大の試みが高等教育や研究に活性化をもたらすか、議論の推移に注目が集まる。	(7/20 静岡)
▲	『静岡大学OB 21人の書展示』「静岡大学OBによる2018書展」が19日より始まる。工学部OBで事務局の小杉修史さんは、「漢字やかな、詩文書、前衛書、てんこくなどバラエティーに富んだ書を味わってほしい。今年は、一部の作品に作家のコメントを付けているので、楽しんでもらえたら」と話している。	(7/19 毎日)
▲	『だもんで/行政、ボランティア…みな復興の力』西日本豪雨では甚大な被害が生じた。被災地の復旧・復興には、行政、市民ボランティア、NPO、さらには企業も交えた連携・協力の仕組みが欠かせない。それをどのように構築していくのか、注目したい。(静岡大学人文社会科学部教授 日誌一幸)	(7/19 朝日)
●	『静岡倶楽部「科学研究奨励賞」10個人3グループ助成』静岡市の経済人や有識者でつくる「静岡倶楽部」は18日、市内の小中学生に贈る「科学技術研究奨励賞」の伝達式を行った。 【小学校・個人】▽河内基希(静岡大附属静岡小6年)「魚が手元に届くまで」▽小泉剛慎(同6年)「どうして植物の葉は水をはじくのだろう」▽石橋史悟(同6年)「ヒメウズラの体内時計のひみつに迫る」▽中津山日彩(同6年)「身近な水をきれいにしよう。2018～私の身近な環境を知って、今より100年後の水を良くしたい～」	(7/19 静岡)
▲	『浜松ITキッズプロジェクト紹介』静岡大情報学部は16日、「情報学ワークショップ」を開いた。未来のIT人材を育成する「浜松ITキッズプロジェクト」の取り組みや今後の展望などについて紹介した。	(7/17 静岡)
●	『親子書道展 5組が大賞』15日、静岡市書道協会主催の親子書道展の表彰式が行われた。 【市教育長賞】大西梨愛(静岡大附属静岡中1年)	(7/17 静岡)
●	『留学生9人が日本語で抱負』第15回留学生日本語弁論大会県大会が15日開かれた。最優秀賞には、母国ミャンマーの教育制度を改革するために文部科学大臣を目指すと言った静岡大人文社会科学部4年のエー・モ・モ・トゥンさんが輝いた。	(7/16 静岡)
■	『外来生物を捕獲調査』静岡市は葵区の麻機遊水地で捕獲調査を行った。特に危険性の高いカミツキガメは見つからなかったが、アカミミガメ29匹などを駆除した。調査には保全生物学が専門の静岡大教育学部の加藤英明講師とゼミ生が参加。加藤講師によるとカミツキガメは遊水地周辺で半年に1匹程度市民が捕獲した事例があるといい、「カミツキガメは今も生息していると考えている。今後も調査を続ける必要がある」と話した。	(7/16 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
●	『駿府城公園で体験いかが/外国人向け着付け、茶道』駿府城公園観光文化施設管理運営共同事業体と写真館を運営する「スタジオオイズミ」は14日、外国人観光客を対象にした時代衣装の着付け、茶道体験プログラムのモニター調査を同公園で行った。静岡大に留学する10カ国25人の学生が無料で参加した。	(7/15 静岡)
◆	『子ども食堂で初の防災訓練』静岡大の学生が運営する子ども食堂「しずおかキッズカフェ」は14日、防災訓練を実施した。子ども食堂が消防と連携して訓練を行うのは県内で初めて。2015年から食堂を運営する同大人文社会科学部3年の小林タバサさんは「子ども食堂には備蓄食料があり、災害時に活用できる。学校や町内会とは違う災害時の役割を女性目線で探っていきたい」と話した。	(7/15 静岡)
◆	『静岡をきれいに』静岡大を含む静岡市内4大学の環境サークルに所属する学生が9月に同市で開催する清掃イベント「うちっちしぞ〜か☆エコアクション」の参加者を募っている。昨秋、県のくらし・環境部主導で発足した4大学の環境サークル連携プロジェクト「インカレecoカフェ」から派生した初の合同企画。	(7/15 静岡)
●	『ハーバリウム制作 静岡大生が体験会』静岡大地域創造学環の学生が東伊豆町稲取の空き店舗でハーバリウム制作の体験会を開き、8人が参加した。地域活性化などを学ぶ大学生4人はフィールドワークで伊豆半島東海岸の同町を訪れ、空き店舗を活用したにぎわい創出策を考えている。	(7/14 静岡)
●	『就活へ男子限定身だしなみ講座』静岡大はこのほど、男子限定の身だしなみ講座を開いた。インターンを控えた3年生や、これから採用面接に臨む4年生など8人が参加した。同大3年の中西竜矢さんは「採用者の視点を知って勉強になった。自分らしさも持ちながら就活に臨みたい」と話した。	(7/14 静岡)
●	『企業の支援で海外留学へ』県はこのほど、海外に留学する県内学生6人の壮行会を開いた。ニュージーランドに1年間留学する海野真由さん(静岡大地域創造学環3年)は同国の活発な地域スポーツクラブの研究に意欲を示し、「スポーツを楽しめる多様性を大切にしながら、静岡発の五輪選手を輩出したい」と目標を掲げた。石井潔静岡大学長は「企業の支援を得て未来の静岡県をけん引するグローバル人材の育成を推進したい」と語った。	(7/14 静岡)
◆	『コンクール曲 中高生と練習』全国大会常連の静岡大吹奏楽団が8日、中高生と共に全日本吹奏楽コンクールの課題曲を練習してレベルアップに役立ててもらおう「課題曲クリニック」を開いた。県内6校の中高生約270人が参加し、楽団の音楽監督兼任指揮者・三田村健さんから1時間半レッスンを受けた。	(7/13 読売)
◆	『イモムシ玩具でプログラミング授業』イモムシ型の知育玩具「コード・A・ピラー」を使って、プログラミングを学ぶカリキュラムを静岡大の塩田真吾准教授が開発し、11日、同大附属浜松小学校で3年生の授業があった。塩田准教授は「クラスに1台あれば、低学年からプログラミング思考を十分に育てられる。コース設定を複雑にすれば、高学年も学べる」という。	(7/12 朝日)
▲	『国公立大学のいま/法人の連携・統合 国が後押し』中央教育審議会では「2040年の大学のあり方」について議論が進められており、大学が連携・統合するための3案を盛り込んだ。その内、国公立大学に最も関係するのは、複数の国立大が法人を統合し、各大学がその下にぶら下がる「アンブレラ方式」の大学運営を認めること。静岡大と浜松医科大学は法人統合と同時に大学再編にも踏み込み、21年度には新法人が、静岡市と浜松市で1つずつの新大学を運営する計画を立てる。ただ、静岡大では「中規模大を二つ作ることはデメリットが大きい」との意見も。両市は約80キロ離れており、どちらに本部を置くかといった課題も残る。	(7/12 朝日)
●	『県立大と静大4人に奨学金』清新信用金庫は9日、本年度の奨学生への認定授与式を葵区の本店で開いた。佐藤徳則理事長が、静岡大教育学部3年 柴田和樹さん、藤田華練さんを含む奨学生4人に認定証などを手渡した。奨学生は、興味、関心を持った最近のニュースについての意見や感想をまとめた論文審査で、15人の応募者の中から選ばれた。	(7/11 静岡)
■	『静大の超小型衛星/愛称は「てんりゅう」』静岡大工学部は10日、開発した超小型人工衛星「STARS-Me(スターズミー)」を同大浜松キャンパスで公開した。公募で決めた愛称「てんりゅう」も発表。地上と宇宙ステーションをケーブルでつないで人や物資を運ぶ「宇宙エレベーター」構想の実現に向けた実験を行う。今夏以降に国際宇宙ステーションから高度400キロの軌道上に放出する。	(7/10,11,12 中日・静岡・読売)
■	『県立大チームが最優秀/静岡テックブラングランプリ』革新的な技術開発に取り組むベンチャーの発掘を目指すコンテスト「静岡テックブラングランプリ」の最終選考会が7日、静岡大浜松キャンパスで開かれた。人工知能(AI)を使って農作業の自動化を目指す静岡大の峰野博史教授のチームに「はましん賞」が贈られた。	(7/10,18 中日・静岡)
●	『9月、全日本学生フォーミュラ/県内3チームが抱負』学生が設計、製作したレーシングマシンの性能を競う第16回全日本学生フォーミュラ大会に出場する、静岡大を含む3校の学生が県庁で記者会見を開き、大会への意気込みを語った。ICV部門出場の静岡大はマシンの重心を下げることに注力し、ハンドルの手元で変速操作ができるパドルシフトも導入した。目標の「完走と総合9位」に照準を合わせる。	(7/10,12 静岡・中日)
■	『全国降水総量 最大に』西日本を中心に甚大な被害をもたらした豪雨で、8日午前0時までの72時間に全国で降った雨の体積量が約533億立方メートルに達し、1980年以降で最大だったことが9日までに、静岡大防災総合センターの牛山素行教授による分析で分かった。	(7/10 静岡)
▲	『「三つの良き友人」大切』吉田兼好は徒然草の中で、よき友三つありとして、物くるる友、くすし(医師)、知恵ある友を挙げている。地震発生の可能性が高まった場合、市町村の多くは避難の呼び掛けを含む何らかの社会的対応が必要と考えているようだが、住民一人一人が先述の三つの良き友を持てるようになるための施策を進めてみてはどうか。こうした友人を皆が持てた時、災害に対する地域の回復力も高まるのではないか。(静岡大防災総合センター客員教授 吉田明夫)	(7/8 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
●	『静大、県立大4人/静岡ガスが奨学金』静岡ガスは5日、第19回奨学生の認定証授与式を開き、静岡大大学院1年の鈴木佑奈さん、同2年の小杉健作さんを含む奨学生4人に認定証を贈った。「自分自身の将来像について」をテーマにした論文選考で69人の中から選ばれた。	(7/6 静岡)
▲	『時評/災害時の安全確保 「避難とは避難場所へ行くこと」との単純な理解にさまざまな問題があることが近年指摘されている。避難の意味も災害により異なる。避難場所ですみず、状況を見つづの判断も重要だ。「避難場所を覚える」より「避難の仕方を覚える」ことの方が、いざというときに応用が効くのではないか。(静岡大防災総合センター教授・副センター長 牛山素行)』	(7/5 静岡)
▲	『グローバル人材育成へ』静岡大は3日、産学官連携を軸にした地域のグローバル人材育成を目指す教育プログラム「アジアブリッジプログラム(ABP)」の報告会と講演会を開いた。鈴木滋彦副学長は「県内企業やアジアの協定校と連携を強めている」と実績を報告した。	(7/4 静岡)
■	『AIを農業に活用/最新事例など紹介』人工知能(AI)を農業に活用した最新事例を紹介する講演会が浜松市であり、静岡大情報学部の峰野博史教授と、AI導入を模索しているキュウリ農家小池誠さんが発表した。峰野教授は、糖度の高いトマトを育てる農家の経験や勘を数値化してAIに学習させた結果、必要な水やりを予想できるようになったと報告した。	(7/3 中日)
●	『熱心に音合わせ』静岡大管弦楽団は16日、第99回定期演奏会を開く。団員たちは6/30に同大で全体練習を行い、演奏スピードや強弱の付け方などを熱心に確認した。松尾諒介団長(理学部3年)は「細かい部分の表現力まで磨くことを意識した。楽しんでもらえたら」と話す。	(7/2 静岡)
▲	『防災対策 想像力が鍵』読売新聞と静岡大学が主催する連続市民講座「どんな時代だったのか〜平成の静岡〜」の第1回講座が30日、開かれた。同大学地域創造学環・防災総合センターの岩田孝仁教授(防災学)が「減災から防災社会へ〜想像力の欠如に陥らない防災を〜」と題して講演し、約120人が聴講した。	(7/1 読売)
●	『優れた研究に助成金』「山崎自然科学教育振興会」は2018年度の研究助成金伝達式を開き、助成対象に選ばれた研究計画を寄せた中高生らに認定証と研究費を贈った。【助成対象：中学校】神谷未来斗(静岡大付属島田中2年)	(6/29 静岡)
●	『学び多様に図書館整備』静岡大浜松キャンパスで28日、付属図書館分館と学生支援機能を備えた新棟「S-Port(エスポート)」の完成記念式典と内覧会が開かれた。式典には大学関係者ら約30人が出席し、石井潔学長は「学生が最大限活用し、グローバルに活躍する人材に育つことを願う」と述べた。	(6/29 静岡・中日)
●	『「ひきこもり」家族で考える』KHJ全国引きこもり家族会連合会・静岡県「いっぶく会」は7月から3回にわたって連続学習会を開く。静岡大大学院の伊田勝憲准教授らがそれぞれ講師を務める。	(6/29 静岡)
▲	『静大、浜医大 再編へ協議会』静岡大と浜松医科大は両大学の再編と運営法人統合を視野に連携の在り方を検討する「連携協議会」を設置した。石井潔静岡大学長と今野弘之浜松医科大学長が28日、記者会見を開き、早ければ2021年度に1法人2大学制へ移行、さらに23年度をめどに地域の公立大、私立大の参画を促す「大学等連携推進法人(仮称)」の設立を検討していく方針を示した。	(6/28,29 静岡・朝日・毎日・読売・中日・日経)
◆	『サンパ企画の募金 静岡ホームに寄贈』シズオカ・サンバカーニバル実行委員会と静岡大のボランティアサークル「響」は、5月中旬に静岡市葵区で開催したイベント期間中に来街者から集めた募金22万657円を、同区の児童養護施設「静岡ホーム」に寄贈した。	(6/28 静岡)
●	『危機的妊娠の現状紹介』静岡大大学院人文社会科学部研究科は、公開講座「危機的妊娠の相談・支援―当事者から学ぶ」を開いた。人文社会科学部の白井千晶教授が危機的妊娠の現状や法制度について説明。社会の課題として「妊娠相談や産科受け入れの態勢充実、専門機関との連携を通し、女性の自立支援をサポートする必要がある」と話した。	(6/26 静岡)
●	『地元企業と接点作り』静岡大国際連携推進機構が主催する「浜松テクノロジーセミナー」が浜松キャンパスで開講した。地元企業の情報が学生に伝わらず、卒業後に地域外に流出するケースが多いとの問題意識から今回の講座を企画。同機構の大八木智一特任教授は、「人材の流出は、長期的に見ると産業界への大きな痛手となる。企業側とじかに接する機会を設け、ここで活躍したいと思う学生を一人でも多く出したい」と話した。	(6/26 静岡)
▲	『世界ジオパーク15首長に認定証』伊豆半島のユネスコ世界ジオパーク認定を祝う集いが24日開かれ、静岡大 小山真人教授ら認定に向けた活動に功績のあった9の個人と団体を表彰した。	(6/25 朝日)
●	『県学生音楽コンクール予選会 54人本選出場へ』予選通過者(ピアノ部門) 長野欽(静岡大付属浜松小6年)、大石真子(静岡大付属島田中3年)、二橋亮輔(静岡大付属浜松中3年)、石川千紗(静岡大付属静岡中3年)	(6/25 静岡)
◆	『避難所に女性の視点を』女性向けの防災講座が湖西市で行われ、静岡大教育学部の池田恵子教授が「男女双方の視点で考える避難生活」について解説した。池田教授は「男性が避難所を運営する機会が多いが、女性でないことと分からないこともある。日頃から自主防災活動に参加して、男性と一緒に取り組んでほしい」と呼び掛けた。	(6/24 中日)
▲	『静岡発こう読む』私が所属する人文社会科学部の同窓会「岳陵会」の同窓生の数は2万人以上に及ぶ。6/2の全学同窓会の交流会では学部長として招かれ、社会で活躍する多くの同窓生の方々と接したが、改めて静岡大学の歴史の重さを再認識した。歴史と伝統に彩られた同窓会のさらなる発展を期待したい。(静岡大 日話一幸教授)	(6/24 中日)
◆	『GK「楽しんで挑戦」』清水エスパルスは21日、静岡大グラウンドでゴールキーパー(GK)教室を開いた。静岡大との地域貢献事業の一環で、子どもたちが対象。捕球やキック、シュートの止め方などを選手が直接指導した。	(6/23 静岡)



種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
▲	『男女の候補者数「均等」にするには』「政治分野における男女共同参画推進法」の目的は衆参両院選挙や地方議会選挙において「男女の候補者の数ができる限り均等となる」よう促すものである。日本の政治面での男女共同参画はかなり遅れているが、男女平等を意識した取り組みを始めることはきわめて重要であり、有権者の意識も変える必要がある。(静岡大 日誌一幸教授)	(6/21 朝日)
■	『希少爬虫類の魅力 本に』「爬虫類ハンター」としても知られる静岡大教育学部の加藤英明講師が、希少な爬虫類探しの軌跡をまとめたエッセーを25日に出版する。加藤講師は「本を通して多くの人に爬虫類の魅力をお届けたい」と話す。	(6/20 読売)
●	『静岡大大学院生に表彰や支援金贈呈』国際テロブチミスト静岡は19日、静岡大大学院で学ぶ女子学生と学内のサークルに対する表彰式と支援金の贈呈を行った。将来性ある取り組みを行う女子学生を支援するクラブ賞には、教育学研究科2年の高林真衣さんが選ばれ、表彰状と奨学金5万円が贈呈された。同大の森林ボランティアサークル「ぐりーんぐりーん」にも支援金5万円が贈られた。	(6/20 静岡)
▲	『構造物耐震 緊急調査へ』大阪府で震度6弱を観測した18日の地震を受け、県教委と静岡・浜松市教委は小中学校、高校、特別支援学校を対象に、ブロック塀などの構造物の耐震性に関する緊急調査を行う方針を決めた。過去の地震でもブロック塀倒壊による被害も出ており、岩田孝仁静岡大防災総合センター長は「地震の度に同じ問題が繰り返されている。ブロック塀の撤去は早急に進めるべき」と指摘する。	(6/19 静岡)
●	『静岡と県大生 10人に奨学金』TOKAIホールディングスは18日、静岡大と県立大の学生計10人に2018年度TOKAIグループ奨学金を贈った。静岡大は「仮想通貨が社会に与える可能性と課題について」をテーマにした論文で対象者を選出。	(6/19 静岡)
▲	『津波の実態、予測解説』県地学会は17日、2018年度の総会と南海トラフ巨大地震に伴う津波災害などをテーマにした講演会を静岡大で開いた。ふじのくに地球環境史ミュージアムの菅原大助准教授が「津波災害の実態と予測－東日本大震災から南海トラフ巨大地震へ」と題して講演。	(6/18 静岡)
●	『学生と起業家が実学』大学生と地域企業家のための「静岡起業スクール」が16日、静岡大浜松キャンパスで始まった。同大の学生団体・静岡ビジネススクールのメンバーと既に起業している事業者が集まり、共に学ぶ。静岡ビジネスアカデミー(代表・情報学部 田中宏和教授)主催、静岡銀行が協力。静岡ビジネススクラブ部長、山内惇熙さん(情報学部4年)は、「大学で経営手法を学んで考えるだけで、実践する場が欲しかった。本気でプロジェクトをビジネスにしていきたい」と決意を述べた。	(6/17 静岡)
●	『噴火の歴史や地形解説』御殿場市の観光交流施設「富士山樹空の森」は16日、富士山をテーマにした講演会を開いた。火山学が専門の静岡大 小山真人教授が「火山がつくった世界遺産・富士山」と題して講和し、「噴火の時はきちんと対処して恵みを楽しみましょう」と話した。	(6/17 静岡)
▲	『脆弱性判断へ具体案/既存の警戒区域で評価』南海トラフ地震で異常が観測された際の防災対応を検討した15日の県防災会議専門部会で、事務局の県から事前避難が必要な対象者を判断するための脆弱性を評価する具体案が示された。部会長の静岡大防災総合センター長 岩田孝仁教授は「事前対応を実施した場合の社会全体のイメージを構築し、共有できるようにしたい」と課題を述べた。	(6/16 静岡)
▲	『インタビュー 平成と私』平成に登場し、定着した取り組みであるNPO活動。98年にNPO法が施工されてからは市民活動が活発化、現在では定着化し、NPOを立ち上げて活動する社会起業家が注目され、社会貢献活動を進路に選ぶ大学生も生まれてきた。今後は、資源となる人とカネをどう集めるかが課題である。(静岡大 日誌一幸教授)	(6/14 静岡)
●	『静岡発 私の提言/小中学校生向け理数教育で成果』静岡大学はこれまで、高校生までの児童・生徒を対象にした教育に力を入れており、現在は特異な才能を伸ばす理数教育プロジェクトを3件展開している。「浜松トップガンプロジェクト」もその一つで、課外授業、コンテスト出場支援、研究所訪問などを実施。将来的には受講生の90%が理数系大学・学部に進学することが目標。(静岡大学 丹沢哲郎理事・副学長)	(6/12 日経)
▲	『静岡大、超小型衛星の愛称募集』静岡大は、宇宙エレベーターの実現に向けて国際宇宙ステーションから放出を予定している同大工学部の超小型衛星「STARS-Me」の愛称を募集している。今年度打ち上げ予定で、宇宙航空研究開発機構と準備を進めている。	(6/12,13 朝日・静岡)
●	『「平成の静岡」振り返る』読売新聞と静岡大は6/30から、連続市民講座を開催する。今回のテーマは「どんな時代だったのか～平成の静岡～」。石井潔学長は講座の見所について、「ホットな話題を取り入れ、防災や地球科学、行政など幅広い分野に関心を持ってもらえるよう工夫した」、「静岡大は過去よりテレビ技術開発の最先端を走り続けている。静岡大の持つ技術力も知ってもらいたい」と話す。	(6/12 読売)
◆	『地域防災 見えた課題』静岡新聞社と河北新聞社が共催する防災・減災ワークショップ「むすび塾」が3日、静岡市駿河区広野地区で開かれた。地元住民が参加して、模擬的な津波避難訓練にも取り組んだ。静岡大防災総合センター長 岩田孝仁教授は、「訓練を通して参加者からさまざまな案が出た。いい取り組みは取り上げて他地域にも積極的に広げていってほしい」と助言した。	(6/12 静岡)
●	『静岡法学科40周年 上川法相が講演』静岡大法政学会は9日、人文社会科学部法学科40周年を記念して講演会を開いた。上川陽子法相が「持続可能な開発目標(SDGs)と法務行政－法の支配と司法外交」と題し、法学科の学生ら約400人の前で講演した。	(6/10 静岡・中日)
◆	『学生に施錠徹底 チラシ配り啓発』6/9の「ロックの日」を前に静岡南署や静岡南防犯協会などは8日、静岡大で、アパートや自転車の施錠徹底を呼び掛ける啓発活動を実施した。	(6/9 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
▲	『ハーフタイム/執念』静岡大情報学部 菅原恵教授は20年以上、死刑確定後に再審開始決定で釈放された袴田巖さんを支援してきた。「ひどい拘禁症状なのは確か。でも生きている。」そこに執念があるとみる。	(6/8 中日)
▲	『時評』中国は現在、「一帯一路」という巨大な政治経済構想が世界中からの抵抗に直面しつつある。中止の兆しが見えない東シナ海と南シナ海での覇権主義的行動も各国の神経を逆なでしている。朝鮮半島での核問題が解決できた暁には、米国の関心も「一帯一路」構想の阻止に向かってくる可能性もある。(静岡大 揚海英教授)	(6/7 静岡)
▲	『時評』4/17に伊豆半島がユネスコ世界ジオパークの認定を受けるまでの道程は長いものであった。観光と防災が融合する理想郷を伊豆半島に作るという筆者の提案を基に、函南町や伊東市と協力した普及啓発行事の実施、まちづくりNPO法人の協力、解説記事の執筆などの活動により、伊豆の人々の理解を深め、実現したものである。(防災総合センター 小山真人教授)	(6/6 静岡)
▲	第383回全国珠算教育連盟段位検定試験合格者＝中部＝【珠算】準4段 長嶋あけみ(静岡大附属静岡中3) 【暗算】準6段 板木秀太(静岡大附属島田中1)	(6/6 静岡)
■	『AI「人狼」駆け引き/静大 性能向上に有効』2018年度人工知能(AI)学生全国大会が5日、鹿児島市で開幕し、静岡大情報学部の狩野芳伸准教授が、AIの発展のため、若者を中心に人気のパーティーゲーム「人狼ゲーム」でAI同士を戦わせることが「有効」とする研究成果を発表した。狩野准教授は「人狼に対応できるAIをつくることができれば、対話システムの向上に大きな意義がある」と強調した。	(6/6 中日)
●	『市立小教諭へ志新たに』静岡市立小学校の教師を育成する「しずおか教師塾」の第9期生卒業式が3日、開かれた。静岡大4年野村陸人さんは「教師塾での学びは、教師としてあり続ける力と人間として強く生きる力の二つの大きな力を与えてくれた。充実した学びへの感謝の気持ちをこれから静岡市の教員として体現していきたい」と誓った。	(6/5 静岡)
●	『知財活用で事業創出/学生がプラン作成へ』大手企業の知財を活用した静岡県内学生のビジネスプラン創出事業の初回セミナーが開かれた。静岡大をはじめとする4大学約50人が参加。	(6/5 静岡)
▲	『カジノ 皮算用バラバラ』カジノ設置を可能にする統合型リゾート(IR)実施法案について、経済効果の試算は各団体によってバラバラだ。静岡大 鳥畑一教授はIRが訪日客数の増加に与える影響を懐疑的に見る。鳥畑教授は『カジノ事業者の狙いは国内の金融資産では。客数が予想を下回った場合、政府や立地自治体にカジノの規制緩和や財政支援を求める可能性もある』と話す。	(6/4 朝日)
▲	『小惑星衝突 謎に迫る』静岡大は5/31、サイエンスカフェin静岡を開いた。理学部物理学科の三重野哲教授が「小惑星衝突による破壊と創造－ガス銃を用いた衝突模擬実験」と題して講演。三重野教授は「タイタンや太陽系内外の小惑星に生命がある可能性はある。小惑星の衝突により、今後地球のような『新たなオアシス』が生まれることもあるのでは」と強調した。	(6/3 静岡)
▲	『震災備え「過信禁物」』防災ワークショップ「むすび塾」の講演会が2日に行われ、東日本大震災で被災した3人の語り部が改めて命の大切さを訴えた。聴講者の一人、静岡大4年の望月ゆうさんは、「災害時の行動や連絡手段を家族でどう対策すべきか考えさせられた」と話した。	(6/3 静岡)
■	『食物繊維から糖質除去/静大准教授ら微生物発見』静岡大学術院工学領域の吉田信行准教授は1日、飲料や食品の原料向けに製造される食物繊維の糖分を高熱のまま除去する微生物を見つけたと発表した。同大学院修士課程2年の岩崎慎太郎さん、日本食品化工(富士市)との共同研究で、3月にオンラインの国際科学雑誌に論文を発表し、特許出願も済ませた。	(6/2,7 静岡・中日)
●	『地域課題解決へ実地調査』静岡大地域創造学環は5/31、2017年度に実施したフィールドワークの成果報告会を開いた。地域課題の解決を目指して活動した15チームの学生が、市民や教職員の前で成果や今後の展望を語った。丹沢哲郎副学長は「昨年を踏まえた発表が多く、成長が伝わった。地域課題は圧倒的に大きいけど、学生にも何かできることはあるはず」と激励した。	(6/2 朝日)
▲	『中小企業、採用苦戦続く/就活 面接解禁』2019年3月卒業の学生に対する経団連加盟企業などの面接を含む選考が1日、解禁になった。学生優位の売り手市場の中、県内の大学生たちも模索しつつ就活を続けている。静岡大学生支援センターの宇賀田栄次准教授は「ミスマッチを防ぐために、学生の本音を引き出し、企業を見極められるよう導きたい。学生にはこの企業と決めた自身の判断に自信を持ってほしい」と話す。	(6/1,2 静岡)
▲	『「道徳」教科化指導力向上へ/思考力育む教材 工夫を』「防災道徳」など道徳と他分野を組み合わせた新機軸の教材開発や授業実践などで研究室が「ぼうさい甲子園」3年連続大賞など、全国的に高い評価を受ける。静岡大教育学部 藤根基真准教授。小学校で道徳が教科化される中、子どもの自立的思考を育むための道徳教育の在り方や今後の展望、課題を語った。	(6/1 静岡)
▲	『時評』不安を身近な防災対策につなげる為、1983年頃から全県下の自主防災組織が「自主防災地図」作りに取り組んだ。こうした取り組みが静岡県内ではあまり聞かれなくなったが、県内には地域の防災訓練に参加する中高生、防災の豊富な知識を持つ「ふじのくに防災士」が多く存在する。自主防災組織とこうした豊富な人材が連携し、地区の防災点検を行ってみたい。県や市町村の一押しがあれば、「自助・公助」を支える「公助」の重要な役割と考える。(静岡大 岩田孝仁教授)	(5/31 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
▲	『区再編 地域に温度差』行政区再編を目指す浜松市は30日、西区協議会への意見聴取を行い、全七区の協議会への聴取を終えた。厳しい意見も相次ぐ一方、肯定的な意見も出ており、地域間で温度差が浮かび上がった。これについて静岡大 日詰一幸教授は、「資料では経費削減効果を力説する一方、デメリットが丁寧に説明されていないのでは。これからの都市経営は人口減と税収減について考えなければならず、区再編はその議論の延長線上にある。市民は積極的に意見を出してほしい。」と話す。	(5/31 中日)
●	『津波被害テーマに 来月、静岡で講演会』県地学会(熊野善介会長)は6/17、南海トラフ巨大地震に伴う津波災害などをテーマにした総会記念講演会を静岡大理学部で開く。	(5/30 静岡)
▲	『赤十字活動へ意識高める』第58回県青少年赤十字大会が27日開かれ、青少年赤十字に加盟する県内の児童・生徒ら約500人が参加し、活動の充実化に向け意識を高めた。静岡大と常葉大の学生は、津波避難や赤十字創設者の障害をテーマにした紙芝居を披露した。	(5/30 静岡)
■	『幻のカニ 量産挑戦』浜名湖では「幻のカニ」と呼ばれるノコギリガザミの養殖研究を続けているNPO法人「地域生物資源研究所」(理事長・久保靖静岡大名誉教授)が、大量生産に向けた新たな取り組みを始めている。ふ化後の稚ガニ数千匹を複数のネットに分けてマングロープのプールに沈め、より生息地の自然に近い形で育てて大量生産につなげる。久保理事長は「東南アジアでも減っている地域があるという。いずれはノウハウを伝えることができれば」と話す。	(5/29 静岡)
▲	『ウチの教授/つくられた『歴史』読み解く/静岡大 小仁田誠二教授』江戸から明治初期の「実録」を読み解く。大学入学後、歴史書の中のフィクションにひかれるように。やがて新聞記事の成り立ちへと関心が広がり、「事実」の表現方法の移り変わりを見つけた。地元の静岡市には「日本書紀を編集した舎人親王が死んだ地」と言い伝えられる地区があり、「『歴史』がつくられていくさま」を解明しようと、学生らと現地調査を続けている。	(5/29 毎日)
●	『「平成の静岡」五つの視点で』読売新聞と静岡大学が主催する2018年度の連続市民講座が6/30から全5回の日程でスタートする。平成が終わるまで1年切ったのを踏まえ、今年度のテーマは「どんな時代だったのか〜平成の静岡」。	(5/29 読売)
▲	『静大吹奏楽 中高の手本に』全国大会常連の静岡大吹奏楽団が、全日本吹奏楽コンクールの課題曲を練習する「クリニック」を通じ、中高の吹奏楽のレベルアップに一役買っている。楽団の音楽監督兼常任指揮者の三田村健さんは「楽器に真摯に向き合う姿勢は同じだと知ってほしい」と話す。クラリネット担当の同大2年 小林瑠々さんも中学生の時に楽団の公開練習を見学。「静大は憧れの存在だったけど、今年は自分が見本になれば」と意気込む。	(5/28 読売)
▲	『静岡ひと/外来種調べ生態系守る/静岡大学教育学部講師 加藤英明さん』公園の池などに生息する外来種を捕まえ、在来種を保護する活動に取り組んでいる。各地で取り組んでいる外来種の調査は、テレビや専門誌での紹介もあり、1回の調査に2000人が集まったことも。外来種もきちんと飼えば、子どもが生物の生態を学べ、命の大切さを実感できるはずだとの思いは強い。「在来種を守る活動を通じて多様な生物の魅力を伝えられれば」と話す。	(5/27 読売)
▲	『静岡発 こう読む』5/6に行われた関西学院大と日大のアメリカンフットボール定期戦において起こった日大選手による反則タックルについて、日大の監督・コーチが指示を出したのではないかという疑惑が起こっている。日大の監督による謝罪が行われたが、反則行為が起きた理由については口が重い。対して反則行為を行った学生が開いた記者会見では、自らの行為を反省し、問題発生の経緯の真実を語った。指導者は真実に口を閉ざし、選手に責任を負わせようとしているようにしか見えない。今回、真実を明らかにする責任は学生でなく指導者にある。(静岡大 日詰一幸教授)	(5/27 中日)
▲	『県内の「まちづくり」学び合う場を』近年、地域の人々・企業が行政と連携して課題解決を行う取り組み「地域運営組織」が注目されている。静岡県内でも掛川市、富士市、袋井市、伊豆市などで同様の組織を制度化した市があり、課題解決の取り組みを行っている。今後は、各自治体のまちづくり・地域づくりの事例を皆で持ち寄り、相互に学び合う「見本市=メッセ」のような取り組みができれば、課題解決のためのメニューを充実させることができるはずだ。(静岡大 日詰一幸教授)	(5/24 朝日)
●	『「良い」選手 何が必要?』静岡大で23日、スポーツに励む小学生を対象にしたアスリート道徳授業が開かれた。授業はスポーツを巡る道徳的葛藤を教育に取り入れ、健全なアスリートの育成を目指す同大教育学部の藤井基貴准教授らが実施。藤井准教授は「選手のことを第一に考えるアスリートファーストが不可欠。その基盤は、自ら考える力を養うこと」と強調した。	(5/24 静岡)
◆	『産学連携し街活性化』地域や企業と学校をつなぎ、学生らの主体的な学びを支援するプロジェクト「Shizuoka学生ラボ」が発足した。静岡大を含む県西部の大学・高校から21人が参加する。19日に行われた発足式にて、学生代表の静岡大二年 田中美羽さんが「浜松のこれからについて向き合い、高すぎるぐらいの理想や目標を持って取り組む一年にしたい」と抱負を述べた。	(5/22,31 中日・朝日)
■	『御前崎に「隆起貝層」』南海トラフで過去に発生した地震で出現したとされる県内唯一の「隆起貝層」を、御前崎市の海岸の岩礁帯で確認したとする調査結果を、静岡大 北村晃寿教授(古環境学)がまとめた。22日の日本地球惑星科学連合大会にて発表する。北村教授は「保存状態がよく、一目で隆起したことが分かる貴重な証拠。防災教材としても保護する必要がある」と話す。	(5/22 静岡)
●	『熱帯地域の茶栽培 来月10日にシンポ』日本熱帯生態学会と静岡大は6/10、同大農学部で「熱帯地域のチャ栽培」と銘打った市民向け公開シンポジウムを開く。減産地域の茶生産の動向や「食べるお茶」の生産と消費などをテーマに講演する。	(5/22 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
▲	『浜松ミカン大好き 静大生らが同好会』浜松市特産のミカンの消費拡大を目指し、静岡大浜松キャンパスの学生らが「みかん同好会」を発足させた。JAとびあ浜松と連携し、PR活動に尽力している。静岡大二年米田凌代表は「自分たちが楽しみながら、周りの大学生にもミカンを身近に感じてもらい、魅力を普及したい」と意気込みを語る。	(5/20 中日)
◆	『静大生の地域活動紹介』清水区自治会連合会は19日、本年度総会を開催し、静岡大地域創造学環の学生が行政や自治会と連携して地域課題解決に取り組んだ「清水区まちづくり協働会議」の活動報告が行われた。モデル地区ごとにテーマを掲げ、ウォーキングイベント開催やご当地パンの商品化、外国語での掲示物・地図の作成などの取組を報告。	(5/20 静岡)
▲	『静大、浜医大 再編へ』静岡大と浜松医科大学が両大学法人の統合を視野に大学編成の検討を始めていることが明らかになった。両大学は今後、協議会を設置し、具体的な検討に入ると見られる。	(5/18,19,26,30 静岡・中日・読売・日経・朝日)
◆	『仲間で悩み事解決 大学生がこつ伝授』いじめや不登校を防ぐ手法として注目される「ピア・サポート」を広めている大学生サークル「ピアーズ」が浜松市内の高校でコミュニケーションのこつを伝授した。サークルは静岡大などの14人で構成。保育や医療、看護の分野に進む希望を持つ17人が受講した。	(5/17 中日)
◆	『この人』社会人として働く傍ら、2016年から静岡大大学院の人文社会科学研究科で臨床人間科学を専攻する大沢郁美さんが、同大にて犯罪被害者支援講演会を企画した。「犯罪被害者支援は個人の問題ではなく、社会全体で考えなくてはならないと思い、学校や県警の協力を得て開催した」と話す。	(5/16 静岡)
■	『今川、徳川の新発見 期待』静岡市と静岡大は14日、今川義元公生誕500年記念事業の一環として、今川家の菩提寺である臨濟寺が所蔵する5000点の古文書調査を始めた。江戸時代以降の臨濟寺の文書を詳細に調査するのは初めての試み。	(5/15 静岡)
●	『光合成生物 仕組み実験』静岡大グリーン科学技術研究所は、最新研究を紹介する「サイエンスカフェ」を開いた。同大の成川礼講師は「光合成生物の巧みな光応答戦略とそれを利用した応用研究最前線」と題して講演。光受容体を解析すると最新の研究手法「光遺伝学」に応用できると説明し、「基礎研究が意外なところで応用されることがあると知ってほしい」と呼び掛けた。講座前には同大が実施する「未来の科学者養成スクール(FSS)」受講者の高校生による研究活動紹介も行われた。	(5/15 静岡)
▲	『違い浮き彫り 適切な合意形成を』原発は国が一元的に規制・監督し、自治体に法的権限はない。しかし安全協定や地元了解の手続きによって自治体は原発に関与してきた。浜岡原発の再稼働をめぐるのは、自治体間の認識の違いが浮き彫りになっている。再稼働については了解の範囲や意思確認手法が重大な問題となり、適切な「地方合意」のあり方の検討が必要だ。これは原発の行く末に大きく影響するため、公正で民主的な意思形成が必要である。(静岡大 中澤高師准教授)	(5/14 朝日)
▲	『義元公顕彰へ連携確認』小和田哲男静岡大名名誉教授が委員長を務める、今川義元公生誕500年祭推進委員会の役員らが13日、義元公の胸塚がある大聖寺を訪れ供養祭に参列した。義元公をしのぶとともに、2019年開催の生誕500年祭に向け関係者に連携を呼び掛けた。	(5/14 静岡)
▲	『日中の大学間 交流促進を』日本と中国の大学学長らが学術交流を深める「日中大学フォーラム」が13日、中国広東省広州市で開かれた。日本からは静岡大など約30の大学・高専が分科会に参加し、学長らが大学のグローバル化や社会貢献などについて議論した。	(5/14 静岡)
▲	『浜松の中心で花を配る』街頭で道行く人に花を贈るプロジェクトが12日、浜松市で行われた。留学生を含んだ静岡大生約15人が参加した。本活動は「Spreading Love」と称され、世界各国で実施されているという。主宰者の同大2年、国際交流サークルに属する丸山健斗さんは、「世界で行われている活動と一緒に参加して良かった。いろいろな人とつながる良さを再確認できた」と話した。	(5/13 中日)
●	『地域づくり学ぶ 講座受講生募集』静岡市は人材養成塾「地域デザインカレッジ(基礎編)」の2018年度受講生を募集している。日誌一幸静岡大人文社会科学部長らが講師を務め、市の人口減少対策や持続可能な地域づくりの考え方を学ぶ。	(5/13 静岡)
▲	『浜松キャンパスで基準超える鉛検出』静岡大は10日、同大浜松キャンパス電子工学研究所の改築に伴う調査の結果、同研究所周辺の土壌から環境基準を超える鉛が検出されたと発表。健康被害などは報告されておらず、今後浜松市の指導に基づいて除去作業を行う予定。	(5/11 静岡)
●	『旅行商品 開発の鍵は』静岡大地域創造学環は10日、旅行事業の商品開発法や、受け入れる側のスキルなどを学ぶセミナーを同校で開き、学生や教職員が出席した。JTB・吉田則昭CS推進担当部長を講師に招き、旅行商品を企画するポイントなどの説明を受けた。	(5/11 静岡)
▲	『サイレントストリートミュージック/SSM』演奏者と聴衆がヘッドホンを付けることで騒音を気にすることなく音楽を楽しめるイベント「サイレントストリートミュージック(SSM)」が5日、浜松市で開かれた。今回のSSMは電子楽器メーカーを退職後に静岡大院生となった菊本忠男さんが企画し、同大情報学部の学生らが協力。参加者の同大4年の伊藤有紀さんは「同時にやっている音楽を切り替えて聞けて面白い。画期的ですね」と驚いた。11月の「静大祭 in浜松」などで体験する機会を増やしていく予定だ。	(5/10 中日)
▲	『時評』土砂災害発生の際にあるとされる「前兆現象」に頼りすぎるのは危険である。前兆のほとんどは「既に山のどこかが壊れはじめている」ことに起因するものであり、「発生」を示す現象と理解するのが適切だからだ。大雨に起因する土砂災害の「前兆」なら「いつもと違う大雨」「ただならぬ増水」など、基本に目を向けてほしい。これらの情報はテレビやネットでも確認できる。(静岡大 牛山素行教授)	(5/9 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
▲	『佐鳴湖の生態系 浜松市民が守る』浜松市の佐鳴湖の生態系を守ろうと、市民グループ「昆虫食倶楽部」が緊急対策外来種アカミミガメの駆除を行っている。同倶楽部はクラウドファンディングによる資金の調達も試みている。会員の1人である静岡大 戸田三津夫准教授は「佐鳴湖のアカミミガメは飽和状態に近いほど増えた一方、在来種のイシガメはほとんど見られなくなった」と語り、夏目恵介代表は「アカミミガメの現状は人間の責任。生態系を回復させたい」と話す。	(5/8 静岡)
▲	『安い給与 公的資金で支援を』「公的資金で介護職員に月10万円の給与支援をすべきだ」。静岡大 土居英二名誉教授はそう提言する。賀茂地域を例に試算すると、所得増による効果は約15億円、雇用は200人増、定住人口は約400人増となるという。「産業振興の予算を振り向けたり、自治体が企業や市民から資金を集めれば財源を確保できる。合わせて公立の専門学校の設定も考えるべきだ」と土居名誉教授は話す。	(5/6 朝日)
▲	『35市町 わがまち地方再生』静岡県内各市町村の地方創生の動きは、大まかに2つに分けられる。1つは埋もれている地域資源を掘り起こし起爆剤にする方法。もう1つは全く新しい街の将来像を立ち上げ、取り組みを積み上げていくもの。隠れた地域の魅力を磨き、有効活用するには、プラットフォームの形成がカギとなる。最終的に街がどうなるかも大切だが、『今まさに街が動いている』と住民が実感するようなダイナミズムこそが街の活性化といえるのではないか。(静岡大 日詰一幸教授)	(5/2 日経)
●	『分子の仕組み 市民に解説/静岡大理学部教授 サイエンスカフェ』静岡大理学部は市民向け講座「サイエンスカフェ」を開いた。理学部化学科の小林健二教授が「分子のかたちと集合 分子から超分子へ」と題して講演。小林教授は「身の回りには分子があふれ、生活に役立っている。生命もさまざまな分子の集合体」と話した。	(5/1 静岡)
▲	『静岡発 こう読む』地方創生は東京一極集中の是正と地方の活性化による日本の活力の底上げが目的だ。現在、各地で地域の独自性を生かした取り組みが進行中である。静岡県内でも大きな課題である人口流出を食い止め地域活性化を進めるため、地域資源の再発見と磨き上げによるブランド化が進み始めている。今後は、従来にない地域課題解決の枠組みの構築が期待され、それに乗り合う各主体が持てる力を十分に発揮することが不可欠である。(静岡大 日詰一幸教授)	(4/29 中日)
■	『春の叙勲受章者』瑞宝中綬章 荒木 信幸(静岡大名誉教授)、小島 義夫(静岡大名誉教授)、瑞宝中綬章 小堺 浩(元静岡大学学生部次長)、紫綬褒章 寺西 信一(静岡大特任教授)	(4/28,29 静岡・中日・朝日・日経)
▲	『生老病死の旅路/武将に学び全国へ城歩きを』越前の朝倉宗滴は「名将とは、一度大敗北をした人を言う」と家訓に残し、「壁」を乗り越えることで人としての飛躍があると気付いている。私にとっての「壁」は、駿府公園に美術館を建てる県の計画に中止を求めたこと。計画のための発掘調査に加わり、戦国大名・今川氏の貴重な遺構があると気付いた。それ以降各地で遺跡保存活動を行った。その関係で、私の死生観はいつまでも城歩きをしたいということである。(静岡大 小和田哲男名誉教授)	(4/28 読売)
●	『情報分析の目 養成したい』静岡大学人文社会科学部が4月、学部共通専門科目の一つとして「地域メディア論」を開設。学生が静岡の町おこしにつながるような情報を「取材」して、毎日新聞静岡版の「しずおかキャンパス」を舞台に発信する試み。日詰一幸学部長は、新設した「地域メディア論」に期待するものとして「記者のサポートを受けながら、地域情報を集めて分析する目、文章で他者に伝える力を養わせたい」と語った。	(4/28 毎日)
●	『「給付型」新設をPR/あしなが募金協力呼びかけ』「第96回あしなが学生募金」が29日まで静岡市中心市街地で実施、市内の大学生・高校生らが寄附を呼び掛けた。同募金を財源に支給される奨学金には4月に変換の必要のない給付型奨学金制度が新設。参加者の静岡大人文社会科学部2年の加藤匡雄さんは「奨学金の背景には『子どもの貧困』がある」と強調し、「給付型の導入で助かったと話す友人もいる。給付型の維持と継続のため、寄付に協力してほしい」と呼び掛けた。	(4/29 静岡)
●	『汚職防止 日本の制度学ぶ』タイの国家汚職防止委員会と同委員会研修プログラムに参加する同国の公務員らが27日、静岡大にて公務員の汚職を防止する日本の制度を学んだ。同大大学院法務研究科の吉川真理教授は日本では諸外国に比べ汚職が少ないとしたが、「天下り問題など汚職に当たると指摘される問題もある」と説明。恒川隆生教授は公共工事に関わる汚職を例に「公務員側だけでなく、関係する業界の意識や構造を合わせて見ていく必要がある」と強調した。	(4/28 静岡)
▲	『「行政学」の事例 ニュースを活用/日詰一幸(静岡大人文社会科学部教授)』行政学は「政治学」との関連性が強い学問だが、政治学の一分野に留まるものでもなく、独自の領域を持っている。行政学理論と行政の実態を結び付け、諸問題と行政学の理論の関りを主体的に学ぶことで、行政活動のあり方に対する公の議論に加わっていきける力を養ってもらえたらと願っている。	(4/24 中日)
◆	『中学部活 企業が支え』中学校の部活動の質の向上と教員の負担軽減を目指す「部活動応援隊」が23日、静岡市で発足。地元企業を中心に、45の企業や静岡大を含む大学などが参加。指導者の派遣や食事メニューの提案を通じて部活動を支える。静岡市教委によると、複数の企業が部活動を支援する取り組みは全国的にも珍しい。	(4/24 中日)
●	『就業体験 産官学金が協力』浜松市は、インターンシップ(就業体験)の実施を後押しする新事業を始めた。5月27日に学生と企業を引き合わせるフェアを開催予定。4月18日にはフェアへの参加を検討する企業を対象としたセミナーを開催。静岡大国際連携推進機構の大八木智一特任教授が、学生を受け入れる心構えを解説し、「大手企業が採用でインターンシップを重視する中、地域ぐるみで中小企業の情報を発信していくことが重要」と強調した。	(4/24 中日)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
●	『「読書離れ」解決策は』読書好きな静岡大の女子学生5人でつくる研究グループ「チームほんづくし」は22日、静岡市内の書店と古書店、図書館の3カ所を巡る見学会を開いた。グループリーダー足立真里奈さん(2年)は、古書店の来店客が特定ジャンルの本を求める傾向があるのに対し、図書館は読書初心者が親しみやすい施設を目指していることを知り、「ターゲット層に違いがあり、興味深い話を聞くことができた」と話した。	(4/24 静岡)
▲	『提言 減災/安藤雅孝(静岡大防災総合センター客員教授)』昨年10月、政府は地震予知を前提にした東海地震の防災対策を見直し、予知に頼らない南海トラフ巨大地震の防災対応を進めることを決めた。しかし、地震の発生時期や場所・規模を確度高く予測することは困難であるため、経験のない手法に基づく避難計画は取りやめ、地震防災は不意打ちへの備えに集中すべきである。	(4/22 静岡)
◆	『産学連携「アクトファスト」フォトンパラーセンター導入』浜松地域イノベーション推進機構のフォトンパラーセンターは2018年度、大学の研究者らでつくるプロジェクトチームが企業の悩み等を解決して新製品の開発につなげる「アクトファスト」を導入する。センターによると初年度は7件の事業を認定する予定。研究者は静岡大や光産業創成大学院大など県内の大学を中心に集める。	(4/21 静岡)
◆	『「産官学金」協力事業開始』地域の「産官学金」が協力して学生のインターンシップを推進する浜松市主催「やらまいかインターンシップコーディネイト事業」が18日始まった。企業向けの導入セミナーでは静岡大の担当者が学生受入の効果やノウハウを説明した。事業には湖西市、浜松商工会議所、浜松、遠州両信用金庫が共催し静岡大が協力する。	(4/19 静岡)
◆	『伊豆半島ジオ認定 活動充実へ決意』伊豆半島ジオパークの国連教育科学文化機関世界ジオパーク認定を受け、推進協議会と県は伊豆市で記念式典を開催した。推進協議会顧問の小山真人静岡大防災総合センター長は「認定で終わりでない。今後は伊豆半島全体での一体感を高めてほしい」と語った。	(4/19 静岡・中日)
●	『鈴木・鈴木と平会長航空事業など講義 静岡大講座』鈴木グループの鈴木と平会長が16日、静岡大で航空事業と地方創生をテーマにした講義を行った。地元企業人が交代で講師を務める同大の「地域社会と企業活動」のトップバッターとして事業紹介とともに地域のつながりを語った。授業はしずおか経済同友会との連携講座で7月までに15回、地元を代表する企業経営者らが講師を務める。	(4/17 静岡)
▲	『災害死ゼロは可能か？津波シェルター全国で開発進む』津波発生時、逃げ遅れた人が避難に使う津波対策用シェルターの開発が全国のメーカーで進められている。静岡大防災総合センター長の岩田孝仁教授は「最後の手段としてシェルターを利用すれば人命が助かる率が上がるのでは」と話す。	(4/16 中日)
▲	『静岡大電子工学研 初改修へ』世界で初めてブラウン管で字を映し出し「テレビの父」と呼ばれた高柳健次郎氏の流れをくむ静岡大電子工学研究所が設立から53年で初めて施設の改修工事に乗り出す。完成予定は2019年。	(4/15 中日)
■	『静岡衛星3年半実験終了 テザー伸びた可能性』宇宙ステーションと地上とケーブルで結んで人や物資を運ぶ「宇宙エレベーター」構想に向け、静岡大工学部が開発・運用した超小型人工衛星「はごろも」が3年半の役目を終えた。計画を主導した山極芳樹教授と能見光博教授が12日報告会を開いた。宇宙でケーブルが伸びる様子を撮影し衛星の位置情報をGPSで取得することは叶わなかったが、ケーブルが20～30メートル伸びたと推測できた。今年度中に別の二つの超小型衛星の間にケーブルを伸ばしそれに沿って昇降機を移動させる実験を行う予定である。	(4/13 静岡・中日・朝日・読売)
◆	『南海トラフ避難基準検討へ』南海トラフ巨大地震への対応を目的とした県防災会議専門部会(部会長＝静岡大岩田孝仁防災総合センター長)の第1回会合が行われた。大規模地震が起きる可能性が平時と比べて相対的に高まった場合に住民らに避難などを促す時期や基準について今後検討していく。	(4/12 朝日)
▲	『時評 地震への関心低下』静岡県が発表した南海トラフ(東海地震)の県民意識調査結果で地震への関心度の項目において「非常に関心がある」人の割合が6年続けて低下している。原因の一つとして東日本大震災での津波の被害を目の当たりにし、内陸は津波がなく安全と単純化した理解をし、内陸地域での関心の薄れも見られる。さらに「南海トラフ巨大地震」は「東海地震」とは別で遠くの出来事と印象を持たれてしまうので駿河トラフから東海沖にかけての巨大地震は「東海地震」と呼ぶべきではないか。「東海地震」は足元で起きる巨大地震であり、関係機関は積極的に対策を打ち出していく必要がある。	(4/12 静岡)
▲	『時評 時代遅れの列車外交』朝鮮民主主義人民共和国の最高指導者・金正恩労働党委員長は3月25日から28日にかけて初の外国訪問として北京を訪れた。金委員長の初外遊が世界中から注目されたのは勧告との南北首脳会談と米朝首脳会談と運動していることと「列車外交」を展開したからである。列車外交は朝鮮半島と世界に平和をもたらすのだろうか。今後も注目しなければならぬ。(静岡大 楊海英教授)	(4/11 静岡)
▲	『静岡発 こう読む』最近、「人生百年時代」という言葉をよく聞くようになった。人生を豊かに生きるためには健康は欠かすことができないが、自分の人生をもっと豊かに過ごすことを考えることも大切だ。これからの大学は、若い人々だけでなく広くさまざまな年代の人々が学ぶ場になる必要があると思う。静岡大人文社会科学部でも法・経済学科に夜間主コースが設置されていて幅広い年代の学生が学んでいる。大学の学びを通じて人生を豊かに生き抜く。これがこれからの日本人の姿になることを期待したい。(静岡大 日詰一幸教授)	(4/8 中日)
▲	『提言 減災/吉田明夫(静岡大防災総合センター客員教授)』地震災害の実効を高めるためには、自助・共助・公助が重要であるということがいろいろなところで喧伝されている。自助や公助についてはどんなことを指すのか理解できるが、共助についてはその趣旨が近所で助け合うことであることは理解しているが、自分自身が共助にどう関わられるか即答できる人は多くはないだろう。災害弱者の救済には地域住民の共助が欠かせない等と公助を担う側から強調されるきらいがあるが、災害弱者・強者であるとかに仕分ける発想にそもそも問題があるのではないかと考える。	(4/8 静岡)

種別	記事タイトル	掲載日・新聞名
●	『静大生書店「棚づくり」』静岡大人文社会科学部の学生で結成する「チームほんづくし」が戸田書店静岡本店で初めての「棚づくり」に取り組んでいる。「若者の本離れ」を食い止めるためにできることを話し合い、学生ならではの「棚づくり」を企画した。平野雅彦客員教授は「本を通したコミュニケーションを読者も書店も考える機会になれば」と期待する。	(4/7 静岡)
▲	『第二の人生豊かに創造』静岡大などで数学教育学を教えた岡本光司さんの陶芸展「私が歩んだ陶芸の道－75歳からの手習い」が開かれている。大学教授を退官後、窯元巡りが趣味だったことから本格的に陶芸に取り組んだ。毎年異なるテーマを設定し新たな作風に挑んでいる。	(4/7 静岡)
▲	『だもんで NPO法20年 活動への理解広がる/日誌一幸(静岡大人文社会科学部教授)』3月19日に特定非営利活動促進法(NPO法)が成立から20周年を迎えた。98年3月に成立したNPO法は日本では「非営利組織」に関する理解が十分ではなくボランティア組織と受け止められることが多かった。この20年間でNPOへの理解もだいぶ進み全国で5万法人を超えた。持続可能で安定的な活動を展開していくために、今後もNPOに対する地域社会の理解や支援は大切である。一方でNPOも情報公開を積極的にする等努力の必要性を感じる。	(4/5 朝日)
●	『静岡大グランシップで入学式』静岡大は4日、静岡市駿河区のグランシップで入学式を開いた。学部生2,037人と大学院生655人が学生生活の第一歩を踏み出した。石井潔学長は「多様性に満ちた総合大学である本学で学び合い、世界を文明的な場所にするべく前進しよう」と呼びかけた。同大に入学した相原柊介さんは「さまざまなことに積極的に挑戦し、社会に貢献できる人間になれるよう励みます」と宣誓した。	(4/5 静岡・中日)
▲	『ノーベル賞多大な貢献 晝馬輝夫さん死去』浜松ホトニクス社の創業者の一人で、「やらまいか」精神で世界の光技術分野に大きな足跡を刻んだ晝馬輝夫さんが死去。晝馬さんが卒業した浜松工業専門学校(現静岡大工学部)の関係者も偉大な先輩を悼んだ。静岡大 中西洋一郎名誉教授は「高柳先生の切り開いた光技術を浜松から発展させた。惜しい人を失った」と語った。前学長で(公財)浜松地域イノベーション推進機構フotonバレーセンター伊藤幸宏センター長は「言葉は厳しかったが、大学のことを思ってくれる人だった」と残念がった。	(4/2,3 静岡・中日・日経)